

[講演録]

図書館情報学を通して図書館に出会う

岡野 裕行

私の個人的な図書館経験は、高校卒業後に図書館情報学を学び始め、図書館について考えるようになったところから始まっている。そして私はここ十年ほどの間に、ビブリオバトル、Library of the Year、一箱古本市、ウィキペディアタウン、ブックピクニック、学生協働など、図書館や本をめぐるいくつかの取組みに関わるようになっていく。私の興味関心がそのようにいくつかの方向へと広がることになったのは、さまざまな人たちとの出会いがあり、交流を深めるなかで本や図書館について「語る」ことにおもしろさを見出すようになったためである。

1. はじめに

みなさまこんにちは。このたびは誌上講演会にお招きいただきありがとうございます。私は現在、三重県伊勢市にある皇學館大学文学部国文学科で教員をしている岡野裕行と申します。大学では図書館司書課程科目のほかに、近現代文学関係の講義をいくつか担当しています。

まずは少し長めの自己紹介から始めたいと思います。私は1977年8月に茨城県南部に位置する新利根村で生まれ、高校を卒業する1996年3月までの18年間をそこで過ごしました。新利根村は1996年6月に町制施行をした後、2005年3月に4町村による大合併によって稲敷市という自治体名へと変わりましたが、私が住んでいたときはまだ村と呼ばれていた頃です。茨城県南部は地理的には霞ヶ浦と利根川に挟まれた低湿地帯であり、古くは香取海(かたりのうみ)と呼ばれた内海が広がっていた地域になります。

地図で見ると広範囲に緑色に塗られている関東平野の一部で、校舎の屋上などの高いところに上れば遠くに筑波山を見ることもできますが、周辺に山らしい山はまったくありません。稲作の盛んな田舎の農村であり、見渡す限りどこまでも一面の田んぼが続いていく風景が身近にありました。私の実家のすぐそばまで古代の海域が広がっていたらしいので、常陸国の南端に位置していたことがわかります。現在その内海は田んぼに姿を変えていますが、古くは数キロメートル先に下総国を望むことができたのでしょう。古稀を過ぎた私の両親は、代々受け継がれてきた田んぼで現在も米づくりをしています。

私が幼少時代を過ごしていた頃には、身近なところに本屋や図書館はありませんでした。いわゆる図書館未設置自治体の一つです。そのため、子供の頃の私は公共図書館の利用経験を得ることができませんでした¹⁾。自分の気に入っ

2021年度誌上講演会について

講演会は学会の中心的な事業の一つですが、昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催を中止いたしました。今年度も同様に中止となったため、やむなく学会誌上で「誌上講演会」を行うこととなりました。快く寄稿して下さった岡野先生に深く御礼申し上げます。

た本を自由に選ぶことができたのは、親がごくたまに隣町の小さな本屋に車で連れて行ってくれたときくらいでした。それでも上には姉と兄がいますので、家には絵本が何冊かは置かれていましたが、所有していた冊数としてはそれほど多かったわけではありません。本棚らしい本棚もありませんでしたので、それほど熱心に本を読むような家庭ではなかったと思います。

地元の中学校を 1993 年 3 月に卒業した後、隣の龍ヶ崎市にある竜ヶ崎第一高等学校に進学しました。自宅から自転車で 40 分くらいかけて通う生活が始まり、学校の帰り道に龍ヶ崎市内の本屋に立ち寄ることもできるようになりました。それでも龍ヶ崎市の公共図書館は自宅から高校まで途中にはなく、高校の所在地からさらにその先にあったので、部活動を終えた学校帰りにわざわざ訪れることも難しい環境にありました。記憶はあいまいですが、高校 2 年生の頃に帰り道をわざわざ遠回りして龍ヶ崎市立中央図書館を 1 回だけ訪れたように記憶しています。特に明確な目的を持たない思いつきの行動だったので、そのときは利用者カードをつくるわけでもなく（そもそも市内に通学している人も利用者カードをつくれることも知らなかったのです）、館内をふらついて本の背表紙を眺め、そのうちの何冊かを手に取っては簡単に目を通し、それほど長居もせずに戻ってしまいました。高校を卒業するまでに公共図書館に足を踏み入れたのは、わずかにこの 1 回だけでした。

この頃は公共図書館が自分の生活とはまったく関係のないものに見えていました。大学入学以前の私にとって、公共図書館とはテレビのなかの映像などでたまに見かけるものでしかなく、よく耳にする話のような「本がたくさん置いてあって静かに本を読む場所」というぼんやりとしたイメージでしか認識できなかったのです。自宅の近くに図書館がなく、隣接自治体の公共図書館も遠すぎて日常的に利用できないような状況下では、今になって振り返ってみても、利用習慣を自分の身体に覚え込ませることはできな

かったと思います。身近にないものを気軽に経験することはできず、はっきりとした形でその存在を認識することも困難だったわけです。

さて、公共図書館を積極的に利用するという経験をほぼ持たないままに成長してしまった私ですが、とても不思議なご縁がいろいろと続きまして、今では図書館に関わるような仕事をしています。図書館情報学という学問はとてもおもしろくて、図書館の歴史や機能について学べば学ぶほど、その存在のすばらしさや重要性に何度も驚かされてきました。特にここ数年、私は Library of the Year やビブリオバトルなどの活動に深く関与してきました。Library of the Year は 2006 年に、ビブリオバトルは 2007 年に始まった取り組みですから、図書館業界の話題としては比較的新しいものになります。私が博士後期課程を修了したのは 2006 年 6 月なので、少なくとも私の在学中には出てこなかった歴史の浅い用語なわけです。そしてこれらの取り組みに私に関わるようになったことにはそれぞれに別の経緯があるのですが、そこに至るまでには、私自身に公共図書館を利用する習慣がなかったことが少なからず影響していると思っています。

今回の誌上講演会では、成長過程で公共図書館の利用習慣が身につかなかった人物が、ふとしたきっかけで図書館情報学を学び始め、曲がりなりにも図書館について研究する立場になったとき、どういった主題に関心を持つようになり、それが自分のなかでどのように変遷してきたのかという観点から話をしてみたいと思います。このような個人的な思い出話をするのが、読み手の皆さまにとって参考になるところがあるのかは私にはわかりません。とはいえ、図書館との出会い方は人によって大きく異なります。私自身は図書館情報学という学問に導かれることで、ようやく図書館のある世界にたどり着いたという感覚を持っています。図書館情報学という学問の世界に入ることから図書館との出会いが始まったという事例の一つとして、私の個人的な話にお付き合いいただけたらと思います。

2. 図書館情報学との出会いと学び

2.1 高校卒業まで

私は数字や図形でできっちりと答えが導かれることの美しさとおもしろさを感じるような算数が好きな小学生でした。中学生になって以降もそれは変わらず、学校の授業では数学の教科書を読むことが一番好きな時間でした。どちらかといえば国語は苦手な科目でしたが、高校生になる頃には国語の先生のおかげでそれが好きな科目へと変わってきました。そして高校3年生になり、大学を選ぶ際に「文系でもなく理系でもない」という多分野にまたがるような勉強をしたいと考えるようになりました。なぜそういう考えに至ったのかといえば、1年生から2年生、2年生から3年生への進級時のコース選択において、将来の進路についてあまり注意深く考えていなかったことの結果でもあります。

私が通っていた高校は、2年生への進級時に理系／文系の2コースに、そして3年生への進級時に国公立理系／国公立文系／私立文系の3コースにクラスが分かれる仕組みでした。それぞれのコースで数学／国語の比重が異なるとともに、社会／理科の科目選択が異なっていました。数学が一番好きな科目だったこともあって、高校入学当初は大学でも数学を学びたいと思っていたのですが、2年生への進級時に興味のある社会／理科の科目の組合せが理系コースにはなかった（日本史を取りたかったのですが理系コースでは地理しか取れなかった）ことと、ほぼ同じタイミングで国語に興味を持つようになったこともあって、2年生で文系コース、3年生で国公立文系コースというクラス選択をすることになりました。将来的にどの大学のどのような学部学科に行きたいのかはまったく見えていなかったため、受験を希望する志望大学に合わせて科目を選んだわけではなく、その時々興味関心だけで社会／理科の科目選択やコースを成り行きで選んでいたということです。高校1・2年生の頃から志望校が固まっていればこういった選択にはならなかったと思いますが、私は受験に必

要となる科目と自分が学びたい科目とが、いまいち自分のなかでつながらなかったままだったので、定期的に実施されていた業者テストについても、1・2年生のうちは毎回異なる志望校を適当に選んで書くような状況でした。

ところが2年生に進級してしばらくしてから気がついたのですが、2年生で理系コースを選択した人は3年生に進級する際に理系／文系のどちらのコースでも選べた（理系から文系に移るのは可能だった）のですが、2年生で文系コースを選んだ人は3年生に進級する際に国公立文系／私立文系のどちらかのコースしか選択できない仕組みになっていました。当初は「2年生で文系コースを選んでも3年生で理系コースを選び直せばいいだろう」と適当に考えていたのですが、「地理よりも日本史を勉強したいから」という安易な理由で2年生への進級時のコース選択をしたために、高校の理系コースの道から外れていくことになりました。

1年生から2年生へと進級するタイミングのコース選択において、単なる受験科目の選択という条件だけで成り行きで決めてしまったようにも思えるのですが、これは後々振り返ってみると重要な転機になっていて、結果的に「理系や文系という枠にとらわれずに勉強したい」という考え方に至ることになります。進級当初はコース選択を誤ったようにも思えたのですが、後に図書館情報学という学問を選択するという行動に大きく影響を及ぼすことになったわけです。そのときどきの判断が後々にどういう意味をもたらすようになるのかは、自分自身でもすぐに理解することは難しく、先の展開はまったく読めないものだなとあの頃を振り返っています。

そして本格的に大学選びを考えるようになった高校3年生の5月頃、友人たちと雑談しているときに、教室の隅に置かれていた大学案内誌を何気なく手にしました。それをめくってみると、国立大学の並びには地元の茨城大学や筑波大学の情報がそれぞれ数ページにわたって掲載

されていました。規模の大きな大学は学部学科の数も多いわけですから、たくさんの情報量を盛り込む必要があったのでしょう。そしてそのままページをめくり続けてみると、筑波大学の情報が掲載された部分の最終ページの下半分に、図書館情報大学というそれまでに聞いたことがない名前の大学を見つけました。その情報量はわずかに半ページだけでした。一学部一学科の単科大学であるがゆえに、ほかの大学と比べても情報量が極端に少なかったのですが、そのことがかえって印象的なものに見えました。わずか半ページだけという情報量では、具体的にどんな大学なのかはわからないままだったと思いますが、そのときに「不思議な名前の大学があるんだ」「図書館情報学というのは聞いたことがないな」と強く印象に残ったのです。図書館とはまったくといっていいほど縁がなく、それほど関心もなかったわけですが、図書館情報学という学問には強く惹かれるものがありました。

そして図書館情報大学の受験科目を見てみると、センター試験が英国数の3科目という珍しい組合せになっていることに気がつきました。こういう組合せはほかの大学では目にすることがありませんでした。私が図書館情報大学に興味を持つようになったきっかけの一つが、このときの特徴的な受験科目の組合せだったのです。各大学の受験科目の一覧表を眺めてみると、英国数社理/英国社/英数理などの組合せばかりが目立ちます。しかし、英国数という組合せは図書館情報大学くらいしか確認できなくて、そのこだわりの部分には私は強く惹かれたのです。

たまたまその場に一緒にいた友達が、「図書館のことについて学ぶ大学がつくばにあるらしいよ」と教えてくれましたが、その友達も知っているのは所在地だけで詳細は把握していないようでした。当時のクラス担任の先生に「図書館情報大学ってどういう大学ですか？」と聞きに行きましたが、先生からも「よく分からない」「とりあえず大学案内を取り寄せなさい」としか言われませんでした。同じ高校からの入学者も数年

に一度くらいのようにでしたし、先輩たちが残すような入試情報の蓄積も少なかったわけです。

同じ茨城県内だし、つくば市ならば実家からもそこまで遠すぎないということで、さっそく図書館情報大学の大学案内を取り寄せました。大学案内に目を通してみると、図書館情報学にますます興味がわきました。図書館について学ぼうとすると、たとえば古い時代の資料を扱ったりするので古典文学の知識は必要になるし、図書館の歴史も学ぶことになります。その一方、図書館ではコンピュータも積極的に活用することになるので、数学の知識も必要になるらしいということが大学案内で確認することができました。図書館情報学ならば、そのときの私の興味関心の幅を狭めることなく、理系/文系を問わずに幅広く学ぶことができそうだと感じたのです。後々になって学際という言葉を知ることになります。理系/文系という枠組みにとらわれない学びは、図書館情報学ならば満たしてくれるという信頼感が強く芽生えてきたのです。

私はさっそく図書館情報大学のオープンキャンパスに申し込みました。当日は大学のワークステーションで **Mosaic** を触らせてもらったことを覚えています。パソコンが自宅にあるような家庭ではなかったため、そのときにはほんとうに「触っただけ」という感覚しか残らず、理解もまったく追いつきませんでした。実際に大学を訪れてみて雰囲気も気に入って、ここに進学しようと志望校が明確になりました。私たちが高校3年生のときは1995年で、ちょうど **Windows 95** のニュースが大々的に報じられていた時期でもありました。オープンキャンパスで対応してくださった先生方の話を思い出しながら、「大学ではこういうことを勉強するのかな？」とニュースを眺めたりしました。

私が通っていた高校には、図書館情報大学への推薦入試枠が男女それぞれ1名ずつありました。ほかに推薦を希望する男子生徒がいなかったため、すんなりと推薦入試も受けることができました。推薦入試では残念ながら落ちてしま

いましたが、その後の前期試験で無事に合格することができました。滑り止めとして私立大学も3校（いずれも文学部日本文学科）を受験しましたが、最終的に図書館情報大学に合格できてほっとしました。

そして卒業式を迎える日に、高校から『白幡（平成七年度版）』という一冊の文集が手渡されました。この文集には、お世話になった有川先生が「もっと遠くを！」という文章を寄せてくださいました。有川先生は同じ学年のほかのクラスの担任だったのですが、私の在籍していたクラスでも国語の授業をご担当されていました。図書館情報大学に進学して理系や文系を問わない勉強をしようと考えていた私にとって、有川先生の言葉からは突き刺さるような強さと魅力を感じました。学部生から大学院にかけて、そして図書館のことを考え続ける仕事をするようになった現在に至るまで、何か迷いがあるたびに読み返している文章です。私を学問の世界に強く結びつけてくださっている指標となる言葉であり、読むたびにとても身が引き締まります。

今回の誌上講演会のために、改めて有川先生の文章を読み返してみました。そしてこの文章をぜひ皆さまにも読んでいただきたいと思いました。中途半端に引用する形ではかえって有川先生の文章のすばらしさが伝わりづらいと思いましたので、この講演のなかで触れることは致しません。有川先生にもご連絡を差し上げて、この誌上講演会への全文転載の許可をいただきました。本稿の末尾に掲載しております。私が高校を卒業するタイミングで触れてからずっと大事にしている有川先生の文章を、ぜひこの機会にお読みいただけると嬉しいです。高校卒業以降の私が、理系や文系という枠組みにとられないような学びを追い求めるようになった原点となる言葉です。高校卒業を迎えるにあたり、このような心に残る言葉をいただくことができてほんとうに良かったと思います。

同じ茨城県内ではありますが、自宅からつくば市まで通うには若干距離があるため、実家を

離れてまずは学生寮に入ることになりました。こうして私は公共図書館の利用経験をほぼ持たないままに、図書館情報学の門を叩くことになったのです。私の図書館経験は図書館という施設そのものではなく、学問としての図書館情報学から始まることになったわけです。

2.2 大学入学

大学生になってつくば市で一人暮らしをするようになると、つくば市立中央図書館が身近な存在になりました。それでも幼い頃に公共図書館の利用習慣がまったく身につけていなかったためか、大学入学後に利用者カードをつくってみたいはいいものの、在学中にそれを積極的に活用することはありませんでした。公共図書館が身近にある生活にはなりましたが、それを習慣的に利用するまでには至らなかったです。学生時代は大学近くにある友朋堂書店という本屋によく出かけており、本は借りずに買って読むという習慣が身につけてきました。その頃は読書記録として鉛筆で書き込みをしながら本を読むようにしていたため、購入して手元に置いておく必要があったことも公共図書館をつかわなかった理由です。その後も本を買って読むというスタイルのまま今日に至っており、本を公共図書館で借りて読むという習慣は今になっても身につかないままとなりました。

また、大学に入学してしまえば、調べ物はほぼ大学図書館で事足りるようになりますので、公共図書館を利用する習慣が身につかなくてもさしたる問題はありませんでした。これは閲覧や貸出サービスだけではなく、読み聞かせやブックトークなどの児童サービスも経験として印象づけられていないということでもあります。詳細は後述しますが、このような公共図書館経験の不足は、私自身の興味関心を「語る」ことへと強く方向づける要因にもなっていると思います。

実際に入学して学び始めてみると、図書館情報学という学問は思っていたよりも随分と取り上げるテーマの幅が広く、大学で学ぼうちに興

味関心も次々と変わっていきました。また、大学で出会った周りの友人たちの話を聞いてみると、当然ながら「図書館司書になるため」という理由で大学を選んだ人が多いことにも気がつきました。それはまた、当たり前のように生活のなかに公共図書館が身近にあった人たちが多いということに気がついたとも言えます。そういった友人たちと話をしていると、私は明らかに育ってきた環境が違いすぎるということを痛感しました。公共図書館の利用経験が明らかに足りないことを思い知らされたわけです。

大学で学んでいるうちに、就職先として図書館司書という仕事も視野に入れたりしたのはのですが、それでも2年生の前半くらいの時点で「図書館司書にはならない」とあっさり決めてしまいました。自らに公共図書館を利用する習慣がないことに自覚的になったこともあり、自分が図書館司書として働く姿が想像しづかったということもあったと思います。無理してそういう方向を目指すよりは、高校生の頃に特徴的な入試科目に惹かれて図書館情報学を選んだときのように、できるだけ理系／文系を問わない姿勢で興味関心を持ち続けながら、幅広い分野の学びをしようという気持ちがますます強くなってきました。図書館情報学に通いながらも、図書館という施設そのものにはこだわらないという姿勢がより明確になってきたわけです。

図書館情報学は一学部一学科の単科大学でしたが、それでも実にさまざまな分野の先生がいらっしやいました。3年生の秋頃になると何人かの先生と面談をしてからゼミ選択を行います。いろいろと悩んだ結果、文学をテーマに卒業論文を書きたいと思うようになり、黒古一夫先生を指導教員に選びました。高校3年生のときにも滑り止めの私立大学を文学部で受験していましたが、大学3年生の頃になると図書館情報学を学びながら文学への関心を持ち続けるような状況になっていたわけです。卒業論文のテーマとして、その頃に関心を持って読んでいた太宰治を選びました。図書館情報学を学問的基盤と

しながらも、そこから日本近代文学を志向するような研究テーマの選び方は、このあたりから見え始めることとなります。

2.3 図書館での再会と再出発

学部の卒業後はそのまま大学院に進学しようと考えていましたが、現役の大学4年生のときに受験した大学院入学試験には落ちてしまいました。当時のことを振り返ってみると、はっきりとした研究計画を立てることができておらず、面接でも研究テーマについて十分な説明もできていなかったと思いますので、不合格になっても当然の結果だったと思います。

進路も決まっていなかったまま大学4年生の夏の終り頃になりましたので、卒業後の身の振り方を考え直す必要がありました。私たちは就職氷河期の世代であり、特に2000年卒業の求人倍率は0.99倍と1倍を割り込むようなひどい状況でしたし、時期的にも出遅れた就職活動になってしまったので内定をもらうのはそれなりに厳しかったです。それでも秋の終わり頃に東京都内の小さなコンピュータ会社に内定をもらい、2000年4月からシステムエンジニアとして働くことが決まりました。卒業後にシステムエンジニアになった大学の同期も多くいたので、インターネットが勢いを増しながら世のなかに広まっていったあの時代の空気を思い出します。

新卒で入った会社には私を含めて5人の同期がいました。ところが東京で一人暮らしを始めて会社員として働くようになったものの、入社して早々に終電の日々が続くようになったことで過労気味になり、身体的にも負担が生じる状態になってしまいました。また、早々と同期のうちの2人が9月と10月にそれぞれ会社を辞めてしまったこともあり、このままその場所で仕事を続ける気力もなくなってしまったため、私も自分の身の振り方をもう一度考え直しました。指導教員だった黒古先生にも夏が終わる頃に相談し、両親にも了解を得た上で、2001年2月の大学院入試を再度受験することを決心しました。

先に辞めた 2 人の同期に続く形で私も 2000 年 11 月には会社を辞め、その後はひとまず実家に戻ることになります。わずか 8 か月間の東京での会社員生活でしたが、仕事内容としてデジタルアーカイブ（文書類のデジタル化とデータベースのシステム構築）を担っていましたので、このときに短期間でも実務に触れたことによる学びはそれなりにあったと思います。

11 月いっぱい東京で過ごして 12 月には実家に戻り、自宅で大学院入試の勉強をしていました。実家に戻ってからはほとんど外を出歩くことはなかったのですが、このときにふと思い立って龍ヶ崎市立中央図書館に行ってみることにしました。前の年に一度落ちている大学院入試を再度受けるわけなので、改めて図書館のことを考えなければならぬと思い、少しでも「公共図書館で勉強をする」という経験をおきたかったです。高校生までとは違って自分で車の運転もできるようになっていましたので、年が明けた 2001 年 1 月には、気分転換も兼ねながら龍ヶ崎市立中央図書館を再訪することにしました。実家からは距離がありますので、それほど頻繁に通っていたわけではなく、2 か月間のうちで週 2 回程度しか利用していませんでした。回数としては数回程度しか訪れていませんが、高校生の頃に何気なくふらりと立ち寄った公共図書館に、今度は利用者としての意識を持ちながら再び訪れることになったのです。

そして龍ヶ崎市立中央図書館で勉強をしていたある日、勉強の合間にふと周りの利用者たちの顔を見回しました。とても驚いたことに、数メートル離れた別の机には前述した有川先生が座っていらっしゃいました。高校卒業から 5 年という時間が経ってから、思いがけず図書館で再会したのです。有川先生もすぐに私の存在に気がついてくださったので、そのままほかの利用者の邪魔にならない場所で立ち話をしました。有川先生は高校教員から弁護士へと転身するため、司法試験の勉強をしている最中とのことでした²⁾。私の方も会社員を辞めて大学院を受験し

直すことを有川先生にお伝えしました。有川先生が寄稿された文章に感銘を受けてから 5 年後、改めて大学院での学びを続けてみようと思つたタイミングで偶然に再会できたことは、つくづく不思議なご縁だと感じています。その後も訪れる時間がたまたま被るタイミングで 3 回くらいは図書館でお会いしたと思いますが、有川先生と同じ空間で勉強をしていたこの時間は、再度学問の世界に戻ろうとする私にとって気持ち的にとっても励みになるものでした。

私はその後 2001 年 2 月の大学院入試を受け、今度は無事に合格することができました。大学院への入学準備のため、私は 2001 年 3 月には再度つくば市に引っ越しをすることになります。私が龍ヶ崎市立中央図書館を訪れていたのは、2001 年初頭のわずかに 2 か月間程度のできごとだったのですが、図書館という空間が再会と再出発の場として見えてきた貴重な時間だったと思います。学部時代の同期から 1 年遅れになってしまう紆余曲折はありましたが、大人になってからの少しだけの公共図書館の利用経験とともに、図書館情報大学の大学院へと出戻りの形で進学することになります。

2.4 大学院進学

修士論文では作家・三浦綾子の個人書誌作成と評伝研究を行いました。卒業論文で取り上げた太宰治の作品に見られるキリスト教思想に関心を持ったというところからのつながりです。これは図書館情報学と近代文学研究とをつなぐ視点に明確に興味を持ち始めたことによるもので、このときには学部の講義でも学んでいた書誌というキーワードを取り上げることになりました。学部の卒業論文は太宰治の作品研究というように、いかにも文学研究らしい内容になっていたのですが、修士論文ではもう少し図書館との接点を探ったほうがいいたろうということになり、そのキーワードとして上がってきたのが書誌という切り口だったわけです。書誌は文学研究のための基礎資料でありながら、それと

同時に図書館におけるレファレンスツールとしても用いられるものであり、振り返ってみても修士論文のテーマにふさわしかったと思います。

修士論文の研究を進めるにあたっては、旭川市にある三浦綾子記念文学館のお世話になり、同館の所蔵資料をもとにした文献調査を2回に分けて行うことができました。三浦綾子記念文学館の開館は1998年6月で、私が大学院の博士前期課程に進学したのが2001年4月ですので、資料調査を行うタイミングとしてはちょうど良かったと思います。修士論文の成果は、その資料編を再構成した『三浦綾子書誌』(勉誠出版)を2003年4月に、本編を加筆した『三浦綾子：人と文学』(勉誠出版)を2005年11月に、それぞれ出版することができました。私は特定のテーマについての文献を網羅的に調査して一覧にするという地道な作業におもしろさを感じているのですが、それは生来の性分による部分もあると思いますが、研究手法としてはこの修士論文の執筆の際に身につけたものです。

そしてそのままの勢いで、2003年4月に博士後期課程に進学しました。所属先は変わりませんが、大学が合併したため、博士後期課程から名目上は筑波大学に変わりました。修士論文では書誌を研究テーマに選びましたが、博士論文では文学館を研究上の重要なキーワードとして掲げることになりました。博士論文のテーマを決めるにあたっては、三浦綾子記念文学館での資料調査の経験が大きく影響しています。文学館は従来、博物館学の研究対象と見なされてきましたが、「文学研究をするにあたっての専門図書館のような機能も有しているのではないか？」という疑問を抱いたことがきっかけとなります。博士後期課程では、「図書館と文学」をつなぐキーワードには、書誌のほかに文学館があるという気づきを得たことが大きかったと思います。これによって自分のやりたいことや方向性がより明確になりました。それでもそのテーマがはっきりと見えてきたのは博士後期課程に進学してから1年くらい後のことなので、私自身も容

易には到達できなかった観点でもあります。

その当時に入手できた文学館一覧を参考にすると、文学館と呼ばれる施設は全国に大小合わせて数百を数えられるとありました。また、1995年6月に全国文学館協議会という業界団体が発足していたことも知りました。そこでその加盟文学館を対象として、その出版活動を網羅的に眺めてみたくなりました。博士論文では奥付に何らかの形で文学館の名前が掲載されている文献を網羅的に調査し、それらを書誌としてまとめてみました。そうすると図録・目録・紀要・復刻・館報など、文学館からは実に多様な出版物が出されていることが確認できました。これら文学館の出版物は、図書館でのレファレンスサービスや文学研究にも活用されてきたものです。

博士論文は2006年6月に提出したのですが、この成果はさらに時間が経った2013年4月に、内容を大幅に補足する形で『文学館出版物内容総覧：図録・目録・紀要・復刻・館報』として日外アソシエーツから出版することができました。母校の筑波大学附属図書館が私の博士論文をオープンアクセスにしており、日外アソシエーツの簡志帆さんという編集者の方がそれを見て連絡を取ってくださったことが出版のきっかけとなっています³⁾。オープンアクセスの影響力を強く感じた個人的な経験として、このときのやり取りはとても印象深いものとして記憶に残っています。この本の出版によって、2014年6月にアート・ドキュメンテーション学会から学会賞をいただくこともできました⁴⁾。

私自身のできごとを以上のように振り返ってみると、学部生の頃から図書館情報学を学びながらも、大学院で書誌や文学館といったキーワードにたどり着くことになった理由は、そもそも私自身に公共図書館の利用経験がなかったため、私の原風景には図書館という存在がほぼ刻まれておらず、結果的に図書館そのものに対する関心やこだわりがそれほど強くならなかったことが大きかったのだと思います。図書館未設置自治体で育ちながら図書館情報学を学ぶとい

うような選択をしたことで、大学の学びで得たことを実際の図書館施設・設備や図書館サービスではない領域へと拡張していく視点が強化されていくことになりました。

2.5 スロベニアの頃

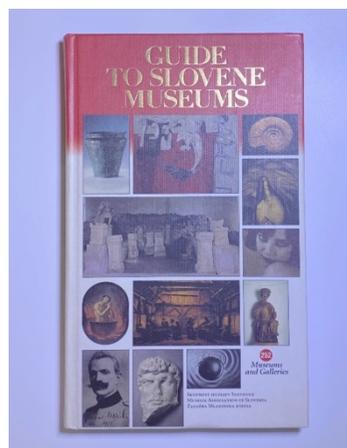
2006年6月に博士論文を提出した後、私は同年10月からスロベニアに移住することになりました。リュブリャナ大学の日本研究講座でサバティカルを取得する先生が出てきたため、その代わりに1年間だけスロベニアで教壇に立てる人を探していたらしいのです。私が博士論文を提出する間際に、たまたま私の指導教員の黒古先生がリュブリャナ大学で1か月間の短期集中講義を務めていた関係もあって、私にそのポジションを引き受けられないだろうか話が回ってきました。博士後期課程の修了後の仕事は特に決まっていませんでしたし、修了によって母校からも離れざるをえない状況になりましたので、先行きの不安もありましたが、せっかくの機会だということでスロベニアに行くことを決めました。その時点で『三浦綾子書誌』『三浦綾子：人と文学』という2冊の本を出していたとはいえ、私は学会などには参加していなかったために学外の知り合いはほぼいない状況でしたし、1年後にスロベニアから帰ってきて仕事のあるではありません。その先の将来的な展開もどうなるのかがまったく想像できませんでしたが、とりあえずは期待されている仕事をしっかりこなしてこようと考えながら日本を出国しました。

スロベニアに住んでいたのは2006年10月から2007年12月までのわずか1年3か月間だけでしたが、この期間はスロベニア国中のさまざまな図書館・博物館をめぐることを意識していました。スロベニアに住むようになってすぐの頃に、リュブリャナ大学近くの書店で『GUIDE TO SLOVENE MUSEUMS』という本を見つけました。スロベニア国内の博物館・ギャラリー252施設の情報が掲載されたこの本を毎日のように眺めては候補機関を選び、休日を利用して

あちこちのまちに出かけていきました。スロベニアの国土面積は日本の四国とほぼ同じくらいで、ほぼ中心部に位置する首都リュブリャナ市からは、高速道路をつかえば2時間程度でどのまちにも行くことができます。図書館・博物館・ギャラリーめぐりのおもしろさを知ったのは、この時期に集中的にスロベニア国内をめぐり歩いた経験が大きかったと思います。

たとえば1991年にユーゴスラビアから独立するに際して、その作品がスロベニア国歌に選ばれたフレンツェ・プレシェーレン（1800～1849年）という詩人がいるのですが、クラニというまちにはその住居が保存されています。スロベニアに滞在していた頃は博士論文を提出した直後だったので、文学資料のアーカイブの観点から考えても、こういった施設が残されていることを興味深く眺めていました。

スロベニアという国のおだやかさは自分の性格にも合っていて、毎日の暮らしがととても楽しかったですね。もともと任期が決まっていた仕事とはいえ、たった1年3か月（任期の延長を打診されたことで当初の予定よりも3か月だけ滞在が延びました）だけで日本に帰ることになったのはとても残念な思いがしました。2007年12月いっぱいですべての仕事を終えましたので、年明けの2008年1月の上旬に1週間ほどウィーンを観光してから日本に戻ってきました。



図：『GUIDE TO SLOVENE MUSEUMS』

3. ARG カフェ&フェスト

アカデミック・リソース・ガイドの岡本真さんが企画されていた ARG カフェ&フェストというイベントがあります。これは参加者のうちから 10 名が 5 分間のライトニングトークを披露する第一部と、立食形式の交流会によって異質な人々が出会う場をつくり、出会った人びとの同士のコラボレーションを促そうとする第二部から構成されています⁵⁾。2008 年 7 月から 2012 年 2 月までの間に、全国各地で 15 回の開催実績があります。私は 2008 年 7 月に秋葉原で開催された第 1 回目の ARG カフェ&フェストに参加し、このときに岡本さんとも面識を持ちました。私が仕事の幅を広げていく上で転機となった重要なイベントです。

私は以下の 6 回の ARG カフェ&フェストに参加し、そのうち 3 回については第一部のライトニングトークにも登壇しています。

①第 1 回 ARG カフェ&ARG フェスト@秋葉原 (2008 年 7 月 12 日)

→この日に岡本さん、佐藤翔さんと知り合いました。

②第 6 回 ARG カフェ&ARG フェスト@横浜 (2009 年 11 月 12 日)

→ライトニングトーク「文学資料はどこにある？」を行いました。

→この日に福林靖博さんと知り合いました。

③第 7 回 ARG カフェ&ARG フェスト@筑波 (2010 年 1 月 17 日)

→聴衆の一人として参加しました。

④第 10 回 ARG カフェ&ARG フェスト@横浜 (2010 年 11 月 23 日)

→ライトニングトーク「図書館のできごと・図書館員の気持ち」を行いました。

⑤第 13 回 ARG カフェ&フェスト@伊勢 (2011 年 7 月 23 日)

→ライトニングトーク「文学と図書館を一緒に学んでみよう」を行いました。

→2011 年 4 月に皇學館大学に着任したこと

もあり、ぜひ伊勢でやりましょうと岡本さんに開催をご提案いただきました。

⑥第 15 回 ARG カフェ&ARG フェスト@京都 (2012 年 2 月 26 日)

→この日の午後に私は関西文脈の会で「日本近代文学館が設立された頃の話：今から半世紀くらい前に文学資料の未来を考えていた人々がその頃にいったい何をしていたのか」という発表を行っていたので、第一部の時間帯には参加することができず、第二部からの参加となりました⁶⁾。

ARG カフェ&フェストを通じて主催者の岡本さんと知り合いになったことは重要なのですが、それに加えて第 6 回の開催時に福林靖博さんと知り合いになったことも転機の一つであり、これが後々に Library of the Year の仕事へとつながっていきます。詳細は後で述べますが、まったく予想もしていなかった話へと展開していく流れを振り返ってみると、「異質な人々が出会う場」「出会った人びとの同士のコラボレーション」という ARG カフェ&フェストの掲げる理念のすばらしさを痛感します。

私が第 1 回 ARG カフェ&フェストに参加を申し込んだ時点では、一緒に参加しようと誘えるような知り合いが特にいませんでしたので、自分一人きりで初対面の人ばかりの会場に向かうこととなります。スロベニアから帰国後の 2008 年 4 月から 2011 年 3 月までの 3 年間は、私はいわゆる専業非常勤講師として暮らしており、専任のポストを探しながら司書課程の授業をいくつかの大学で担当していました。週 2 回ほど非常勤講師の仕事で外出する以外は、ずっと自宅にこもって一人で作業している日々が続いていました。博士後期課程の修了後は母校である筑波大学との直接的な接点も薄れてしまっていましたし、スロベニアから帰国した後も研究上の知り合いがいない状況は変わりませんでした。そういう状況だったこともあり、第 1 回 ARG カフェ&フェストに参加して知り合いが

増えてなかったら、私はもしかしたら研究者生活を諦めていた可能性も高かったと思います。これは大げさな言い方ではなく、私にとって ARG カフェ&フェストはそう言い切れるくらい大きなインパクトがあったのです。

特に研究上の仲間や知り合いもいなかったその頃、私がなぜ第 1 回 ARG カフェ&フェストというイベントの存在に気がつき、それに参加することになったのかというと、大学の後輩である佐藤翔さんの書いていたブログ『かたつむりは電子図書館の夢をみるか』を購読していたためです。このときには佐藤さんもライトニングトークをすることになっており、2008 年 6 月 29 日のブログ記事にそのあたりの事情が書かれています⁷⁾。佐藤さんのブログから岡本さんのブログ記事「第 1 回 ARG カフェへの招待」へと飛び、そこから興味を持って参加を申し込んでみたという流れになります。そういう情報の流れを考えると、佐藤さんのブログが私と岡本さんをつなげてくれたと言えます。佐藤さんにはこの場を借りて感謝の言葉を伝えたいです。そして改めて振り返っても、この時期の『かたつむりは電子図書館の夢をみるか』は更新頻度が高く、記事の内容にも引き込まれる力を感じます。

なお、私が岡本さんの名前を初めて認識したのは、それより少し前の 2008 年 5 月 4 日の佐藤さんのブログ記事「岡本さん来筑&農林水産研究計算センター、農林水産研究情報センター訪問」になります⁸⁾。この記事を読んで「岡本さんってどういう人なんだろうか？」と思ったのがきっかけです。そしてさらに話を過去に遡ってみると、そもそも私が佐藤さんのブログの存在を知ったのは、2007 年 5 月 25 日の「え、これ本当に山本順一教授？」という記事になります⁹⁾。このときの私はまだスロベニアで暮らしていた頃で、今となっては具体的に何について調べていたのかは思い出せませんが、山本順一先生の書かれた文章を調べる必要があってウェブで検索してみたら、何かのタイミングで佐藤さんのこのブログ記事が引っかかってきた

のです。おもしろい記事を書く後輩がいるんだなと思ひまして、これ以降に佐藤さんのブログに注目するようになり、スロベニアに滞在しているうちからその愛読者になっていました。佐藤さんのブログに第 1 回 ARG カフェ&フェストの記事が公開されたのは、スロベニア滞在中の気づきからさらに 1 年後のことになります。

4. Library of the Year

4.1 Library of the Year との接点

2006 年に始まった Library of the Year は、「良い図書館を良いと言う」を理念に掲げた表彰制度です。その表彰プロセスの議論を通して、図書館の「良い」ところを言語化しようとする取り組みです。NPO 法人知的資源イニシアティブが主催するイベントで、現時点では 2021 年の第 16 回目まで毎年開催が続いています。

そもそも私と Library of the Year との接点をつくってくれたのは、国立国会図書館の福林さんになります。福林さんはその当時に Library of the Year 選考委員会の副委員長を務めていて、2011 年に「選考委員になりませんか」と声をかけてもらいました。前述したとおり、福林さんとは 2009 年 11 月 12 日の第 6 回 ARG カフェ& ARG フェスト@横浜で知り合いました。たまたま同じタイミングでライトニングトークに登壇していたのです。福林さんは勉強会@中央線 NEO というイベントを長く主催されていて、後日に私のこともその話題提供者として誘ってくれました。福林さんとの出会いから半年後の 2010 年 6 月 15 日に、「高円寺ノラヤ」というお店に 10 人ほどの聞き手が集まってくれて、私は「文学館とは何か：名前のある資料の収集・保存・公開業務とその周辺」という話をみなさんに聞いてもらいました。2009 年 1 月に私は文学館研究会という看板を自分一人だけで掲げていたのですが、福林さんはこの活動に注目してくれていたみたいです¹⁰⁾。文学館研究会を立ち上げたときの経緯は、過去にアカデミック・リソース・ガイドのメールマガジンに寄稿しています

ので、その記事をご覧ください¹¹⁾。

勉強会@中央線 NEO は、学会発表などのように自発的に発表するような機会ではなく、誰かから「あなたの話を聞きたい」「文学館について語ってほしい」と依頼されて話をした最初の機会になります。勉強会@中央線 NEO の特徴については、第 6 回 ARG カフェ&ARG フェスト@横浜のなかでも福林さん自身がライトニングトークで語っているのですが、小規模な集まりだからこそのおもしろさがある空間になっていて、話題提供者として話しをしていてとても楽しかったですね。文学館の研究というテーマがいまいち理解されづらかった状況のなかで、誰かから「依頼された」「求められた」という経験は自分の研究を進めていく上でも自信にもなりましたし、自分のやっていることはきっと間違ではないんだろうなという感触を得ることもできました。福林さんにはとても感謝しています。2011 年に三重県に移り住むようになってから、同じような形式で勉強会@近鉄線という集まりを主催するようになったのですが、これについても福林さんからの影響を強く受けています。

こういったやり取りをしてきた付き合いがあるので、福林さんからの **Library of the Year** の選考委員就任の依頼を断る理由はまったくなくて、むしろ再び役回りとして私という存在が「求められた」と感じたできごとでもあります。福林さんがいなくなったら、私はおそらく **Library of the Year** というイベントに関わることはなかったと思います。そしてその背景には、出会いのきっかけとなった ARG カフェ&フェストの影響が及んでいることを改めて確認しておきたいと思います。岡本さんが ARG カフェ&フェストの設計の目的に、「出会った人びとの同士のコラボレーションを促そうとする」ことを掲げていましたが、私と福林さんとのつながりはまさにその事例の一つだと思います。

とはいえ、**Library of the Year** の選考委員に就任するにあたっては、いくらかの迷いがありました。冒頭でも述べたように、私には公共図書

館の利用経験が著しく欠けています。「私でいいのか？」という思いは当然ありました。それでも、**Library of the Year** の理念にある「良い図書館を良いと言う」という言語化の作業ならば、自分にもできるのではないかと思います¹²⁾。求められているのは特定の図書館の利用経験ではなく、図書館の「良い」というところを明確な言葉で示すことです。そしてまた、曲がりなりにも学部生の頃から博士後期課程に至るまで、10 年近く図書館情報大学で学んできたという自分の価値観を信頼しようと思いました¹³⁾。

生まれ育った村に公共図書館がない環境だったこともあって、私は自分自身の成長過程ではその利用経験を身につけることはできませんでした。しかし、これから先に未来のために図書館を語ることはできるのではないかと。過ぎ去ってしまった自分の過去、公共図書館の利用経験が得られなかった過去を変えることはできませんが、これから先の図書館の未来を語ることで、過去の自分が置かれていた状況を相対化して捉えながら、新しい物の見方で過去を振り返ることはできるのではないかと。幼かった頃の自分が欲しかった図書館、必要としていた図書館の世界は、これから先の未来の図書館を語ることで見えてくるかもしれない。そのときにそういうことを思ったのです。幼い頃からの成長過程において公共図書館の利用経験がないということは、私のなかに公共図書館の原風景も存在していないということです。言葉を変えれば、これは先入観なしに図書館というものを見る目になっているということでもあります。福林さんには「私でよろしければお引き受けします」と簡単に受諾のお返事をしましたが、その陰で私はさまざまな思いをめぐらしていたのです。

そして図書館情報大学で学んできた自分の価値観を信頼するということは、それは学部生の頃からさまざまな講義や演習でお世話になってきた先生方への恩返しでもあると思うようになりました。教え子の立場にいる自分が **Library of the Year** の選考委員への打診を引き受けるこ

とは、私を育ててくださった多くの先生方に対する自分なりの感謝の気持ちを表現する機会でもあると思ったのです。高校生だったあの頃に図書館情報大学を選んでよかったと思える。図書館情報学に出会えてよかったと改めて過去を振り返ることができる。2011年のLibrary of the Year 選考委員をお引き受けしたときに、私はそういう思いをひっそりと込めて福林さんにお返事をしたのです。後々に福林さんからは個人的に「Library of the Year の選考委員に筑波系の人がほしかった（慶応系の人が多かったので）」という裏話も教えてもらいましたが、そういったさまざまな条件が重なったことと、そしておそらくは福林さんの同世代という意味でも、そのときに三十代前半だった私の立ち位置はタイミング的にちょうど良かったのだと思います。

長きにわたってLibrary of the Year の座長を務めてこられた大串夏身先生や私をその世界に引き込んだ福林さんを始めとして、初期からの主要なメンバーは10周年となるLibrary of the Year 2015 を最後に退任されています。そして2016年の再開から選考委員長となった山崎博樹さんも、2020年をもってそのお役目から退任されました。そして山崎さんからお役目を引き継ぎ、2021年には私がLibrary of the Year の選考委員長になりました。同じ船に乗り続けていただけとも言えますが、自分自身でもなぜこういう展開になったのが不思議でなりません。

それでも選考委員長に就任することになったこの状況について、私なりに振り返ってみれば、Library of the Year の掲げる「良い図書館を良いと言う」というコンセプトに共感したからということに行き着きます。その年ごとの図書館や図書館的活動の「良い」ところを言語化する知的作業に魅力を感じ、図書館を「語る」ことに対して素直に強い共感を覚えたからです。Library of the Year における言語化は、第一には受賞機関のために行います。受賞機関の「良い」ところを外野の立場から言語化していきます。そして第二には、みんなのために言語化を行います。受

賞機関の当事者だけではなく、図書館に関わっているみんなが学ぶべき突出した活動を知るために「良い」という言葉を口にしていきます。そして第三に、私自身のためでもあります。図書館について「語る」こと、図書館の「良い」ところを記録に留めること。そのように「語る」ことを促していく過程は、私自身が図書館との接点を持ち続けていくための機会にもなっています。図書館情報学を通して、私は図書館を「語る」ことのおもしろさに気づくようになったのです。

4.2 Library of the Year で何をしてきたか

私はこれまでにLibrary of the Year について、以下の二つの文献にその特徴や意義をまとめていますので、詳しくはこれらをご覧ください。

- ①岡野裕行. 「良い図書館」を「良い」と言い続ける未来のこと（総特集=Library of the Year の軌跡とこれからの図書館）. LRG=ライブラリー・リソース・ガイド. no.13, 2015-12, p.15-54.
- ②岡野裕行. Library of the Year 想い巡り（特集=いま、Library of the Year と向き合う）. LRG=ライブラリー・リソース・ガイド. no.37, 2021-11, p.8-57.

このうち、2015年に発表した①の文献は、もともとLibrary of the Year を第10回目となる2015年で終えることが決まっており、それを受けての総括記事にもなっています。これについては、版元であるアカデミック・リソース・ガイドの岡本さんに執筆を強く勧められたことで書き進めたものです。

Library of the Year 2011 では東近江市立図書館、Library of the Year 2012 ではビブリオバトルのプレゼンターとして、私は最終選考会の舞台にも立たせていただいています。2011年に東近江市立図書館のプレゼンターを担当したのは、関東在住の選考委員が多いなかで、もっとも受賞機関に距離的に近いという理由がそのときの

話の流れだったように記憶しています。スポンサー企業から多少の協賛金はいただいているものの、Library of the Year の事業は基本的には選考委員の手弁当で活動を行っているものであるため、少しでも交通費などの必要経費を抑えたいという事情があったのです。プレゼンターにご指名をいただいたので、発表資料をまとめるために東近江市立図書館まで取材に訪れました。私は普段から早口なこともあり、言葉を積み重ねて畳みかけるようなスタイルで話をすることが多いのですが、Library of the Year 2011 でのプレゼン手法は、私個人としては珍しいやり方として、できるだけ丁寧に説明するためにやや速さを抑え気味にした話し方を試みました。このときは結果としては小布施町立図書館に大賞を取られておりますので、もう少しプレゼンの構成を練る余地はあったと思いますし、自分のスタイルに合った方法で臨んでも良かったのではないかと終わってから反省をしました。

翌 2012 年の Library of the Year 2012 では、ビブリオバトルのプレゼンターを担当することになりました。2011 年のときの反省点を踏まえ、この年は畳みかけるように言葉を積み重ねていくプレゼン手法を採用しました。このときに特に意識したのは、口頭で話す内容とスライドに映す言葉をできるだけ異なるものにする（スライドの内容をそのままなぞるような話し方をしない）という試みです。視覚情報はスライドで見てもらい、聴覚情報を喋り言葉で届けるというもので、持ち時間の 7 分間のなかに盛り込める情報量をどこまで増やせるのかということを考えました。当時の発表資料を見返すと、用意したスライドの枚数が 121 枚ありましたので、1 分間あたりで約 17 枚を処理していたこととなります。スライド 1 枚あたり 3.5 秒くらいで画面を切り替えながら、さらに口から出る言葉はスライドに書かれた言葉を単純に読み上げることはしないという方針でプレゼンをしました。票数としては僅差ではありましたが、結果としてこのときは大賞を取ることができましたので、

その当時の審査員の人たちの印象に残るようなプレゼンができたのではないかと思います。

2011 年に Library of the Year に関わるようになってから、既に 10 年を超える時間が過ぎました。そして今年の Library of the Year 2021 では、予想もしていなかった選考委員長のお役目をいただくようになりました。2020 年まで選考委員長を務めていた山崎さんからその立場を託される形になっておりますが、山崎さんからは「ビブリオバトル普及委員会の代表も長く務めていたから適役でしょう」という誘い文句をいただきました。また、世代交代することで一気に若返らせたいという話でもありました。さすがに選考委員長のお役目を担うことには迷いはしましたが、せっかくのお話ですのでありがたくお引き受けすることにしました。初めて選考委員長として向き合った Library of the Year 2021 も無事に終えることができてほっとしています。

5. ビブリオバトル

5.1 ビブロフィリアの設立

ビブリオバトルについては、2010 年 6 月にツイッターを介してその存在を把握しました。それを教えてくれたのは、私の大学の後輩でもある岡部晋典さんのツイートです¹⁴⁾。その後、2010 年の秋学期に非常勤講師として出講していた相模女子大学の「読書と豊かな人間性」の授業内でさっそくビブリオバトルの実践を行っています。佐藤さんには 2008 年に ARG カフェ&フェストを、岡部さんには 2010 年にビブリオバトルを、それぞれツイッターを介して教えてもらったこととなります。私がたどってきた歩みを振り返ると、ツイッターやブログを介して重要な情報を得ていた場面がいくつかありまして、特に図書館関係者の人たちのツイートはとても参考になっています。つくづくあの頃にツイッターがあつてよかったと思っています。

その後、ご縁があつて 2011 年 4 月に皇學館大学文学部国文学科に着任しました。それと同じ年の 11 月から、ビブリオバトルの普及活動にも

積極的に関わるようになりました。これは2011年6月に行われた情報メディア学会第10回研究大会に、ビブリオバトル考案者の谷口忠大さんがパネリストとして登壇されており、その日の懇親会の席で直接の面識を持ったことがきっかけです。この日は立ち話で簡単なやり取りだけでしたが、前の年に相模女子大学でビブリオバトルをやったときの経験もあったので、ゲームとしてのおもしろさを感じたこと、図書館でもいろいろと展開できそうだということをお話しし、これから皇學館大学でもやってみようと思っていることを伝えました。谷口さんとはツイッターでもつながり、相互に情報交換ができるようになりました。私のビブリオバトル普及委員会の会員番号は50番でした。しかし、加入当時はまさかその後に自分がビブリオバトル普及委員会の代表理事になるなどまったく想像できませんでした。このあたりの経緯については、2013年6月に出版した『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』、そして私の教え子の河野亜美さんと2020年9月に共著で発表した「三重県における高校生ビブリオバトルの参加側と普及側の立場から見てきたこと」という文章にまとめています¹⁵⁾ ¹⁶⁾。

私自身がビブリオバトルの普及活動に積極的に力を入れ始めるきっかけの一つが、2012年7月に当時のゼミ生たちが創設したビブロフィリアというサークルの存在です。これは私のゼミ第二期生である加藤優さん（現・散策舎店主）らが自主的に立ち上げたサークルです¹⁷⁾。もともとは新しく私のゼミ生になった学生たちに、自己紹介がてらビブリオバトルをやってもらっているところから始まったのですが、加藤さんらの世代はビブリオバトルのおもしろさにすぐに気づいてくれました。私はビブロフィリアの顧問教員としてビブリオバトルに関わりながら、学生たちを見守る役回りとなりました。今こそビブリオバトルを活動目的とした大学のサークル設立は珍しくありませんが、その当時は全国を見回しても大学のなかのビブリオバトルの

団体は少なく、皇學館大学ビブロフィリアは早い事例の一つとしてビブリオバトル普及活動の歴史に名前が残ることになりました。ありがたいことに、2021年9月にはBibliobattle of the Year 2021の特別賞を受賞しています¹⁸⁾。

ビブロフィリアを設立したことによって、顧問教員の立場である私自身も活動の幅が大きく広がりました。普段は学生同士が皇學館大学附属図書館内で活動していますが、そのほかにも津市のカラスブックスが企画したホンツツキ、伊勢銀座新道商店街のお祭り、三重県総合博物館（MieMu）、伊勢河崎一箱古本市などでのビブリオバトルの開催のほか、三重県教育委員会が主催する高校生ビブリオバトル大会や中学生ビブリオバトル大会の司会・運営、松阪市の市民大会の開催支援など、多くの活躍の場を得ることもつながりました。学生の引率という形を取りながら、三重県内のあちこちの小中高等学校に出かけては学生たちと一緒にビブリオバトルを実施してきたことで、ビブリオバトルに対する注目度の高さや広まり方を肌で感じることができました。特に県の教育委員会に協力依頼される形でビブリオバトルの学生団体が動くという事例については、ほかの都道府県を見渡してみてもその当時としては珍しい取り組みであり、先駆的な活動になっていたと思います。

5.2 ビブリオバトル普及委員会での活動

2013年6月から、ビブリオバトル普及委員会の東海地区代表になりました。その役目を担うことになったのは、それまで東海地区代表を担っていた方が都合で退任の希望を出してこられたため、これによって地元の三重県だけではなく、愛知県・岐阜県・静岡県との普及活動も視野に入れることになりました。また、同じタイミングでビブリオバトル普及委員会の理事の一人にもなりました。これも特定の地域に偏ることがないように、できる限り全国の各地域から理事を選出したいという意向があり、それに応える形で東海地区からの一人として理事会メンバー

に加わったという事情があります。これらはその当時にビブリオバトル普及委員会の代表を務めていた谷口さんからの打診によるものです。

その後、2015年6月からは谷口さんに代わってビブリオバトル普及委員会の二代目の代表理事という立場になりました。それまでに理事の一人としての活動をしていたとはいえ、谷口さんが代表をずっと続けるものだと勝手に思い込んでいましたので、まさか私が代表の役目を担うことになるとはまったく予想していませんでした。これは谷口さんが2015年からサバティカルで1年間をイギリスで過ごすことになったため、国内にいる誰かが代表理事を務めたほうが良いだろうという判断がありました。これについては谷口さんから私に対して直々に打診があり、私が谷口さんのいる京都まで赴き、二人だけで今後のビブリオバトル普及委員会のあり方について相談しました。谷口さんが不在の1年間だけを代表代理という形で進めてはどうかという案も出しましたが、それは谷口さんが固辞されました。話し合いの結果として、谷口さんはきっぱりと辞めて正式に代表を交代してしまったほうが良いだろうという話に落ち着きました。

その後、総会での承認を得て2015年6月から私の立場が代表理事に代わり、これまで以上にビブリオバトルの普及活動に注力し始めることになりました。2014年に始まったビブリオバトル・シンポジウムを継続して実施していくことや、2016年から続けているBibliobattle of the Yearの運営など、代表理事として考えることはたくさん出てきました。ビブリオバトル・シンポジウムについては、2015年からは図書館総合展運営委員会に共催をお願いする形で、フォーラムの一つに組み込んでもらったりもしました。ビブリオバトル普及委員会がビブリオバトル・シンポジウムを通して図書館総合展の協力を仰ぐことになったのは、代表理事である私が2013年から図書館総合展運営協力委員を務めていたというつながりがあったことによります。

また、2013年以降は毎年のようにビブリオバ

トルに関する講演依頼をいただくようになり、全国各地の学校関係者・公共図書館関係者の研修会講師を務めることも増えてきました。ビブリオバトルの社会的な意義や効果について考える際には、こういった研修会講師のお役目を務めたことはとても役立っていて、あちこちの自治体に赴いてはビブリオバトルについて繰り返し話すことで、それを語るための言葉も私のなかの引き出しとして随分と蓄積されてきたように思います。ビブリオバトルというゲームの仕組みはいろんな人たちを動かし始めていて、実におもしろい取り組みだと改めて思うようになったのは、講演会・研修会に講師としてお招きくださった各地の自治体や団体の関係者のみなさまのおかげです。ビブリオバトルの掲げる「人を通して本を知る／本を通して人を知る」というコンセプトはほんとうにすばらしいと思います。

そのほかにも、代表理事になってからは大学生や高校生によるビブリオバトル全国大会の決勝の司会者の役割も、数年間にわたって続けることになりました。全国大会という大きな舞台に勝ち上がってきた学生さん・生徒さんたちの活躍を同じステージのすぐそばで眺められるのはとてもおもしろくて、司会という特別な立ち位置で発表を見守ることができたのは、ほんとうにありがたいことで役得だと感じていました。

そして2021年6月には、6年間務めてきた代表理事の役目を辞すことになりました。これは私自身が「代表理事のポストは特定の人が長く続けない方が良い」「組織は新陳代謝があったほうが良い」と考えていたこともあり、任期を設けてほしいと理事の皆さまにお願いしたことによります。こういう考え方に至ったのは、2015年のときに代表代理というやり方を固辞した谷口さんの振る舞いも影響していると思います。当初は谷口さんと同じく5年間という任期ではどうかと話していましたが、私が辞めるとなると三代目の代表理事を担う人を考えなければならないため、その体制が整うまでということで、原案より1年先にした連続6期まで（6年間を上

限とする)と任期を決めました。2019年6月にこの任期を施行する形で規約を変更しています。これによって2019年6月の時点で、私は「代表理事を務めるのは残りあと2年間(2021年6月まで)」という意識に変わり、その残りの2年間の役目をしっかりまっとうしようと考えていました。任期を決めたときは先のことはまったく読めませんでした。その後COVID-19による社会的な混乱も生じたので、結果的に2021年6月まで代表理事を続けるという形にしておいて良かったと思います。

なお、前述した河野亜美さんは2020年当時にはまだ現役の学部4年生でしたが、その段階でビブリオバトル普及委員会の理事に就任してもらいました。その1年後には私がビブリオバトル普及委員会の代表理事の役目を離れることが決まっていたこともあり、東海地区の普及活動にも積極的に関わってもらいたかったからです。河野さんは2015年の高校生ビブリオバトル三重決戦にバトラーとして出場した経験を持っており、皇學館大学へと進学してからはビブロフィリアの部員および部長として継続的に三重県の高校生大会の運営に関わってきたという立場にいます。私もそうですが、大人になってからビブリオバトルを知った世代は「ビブリオバトルを学校で知る」「高校生大会や大学生大会に出場する」といった経験を持つことができません。ビブリオバトルという取組みが学校教育のなかへと広まっていく様子は、高校生から大学生にかけてビブリオバトルに深く関わってきた河野さんの姿勢から学ぶことはとても多かったです。

5.3 Library of the Year とビブリオバトル

先に述べたように、2012年にビブリオバトルがLibrary of the Year 2012の大賞を受賞しました¹⁹⁾。私はこの受賞時のプレゼンターの役目を務めています。この頃はビブリオバトル普及委員会の普及委員として加入していたものの、まだ理事どころか東海地区の地区代表にもなっていない頃でした。その頃のビブリオバトル普

及委員会のなかでもそれほど目立った活動をしているわけではなく、本務校の皇學館大学で2012年7月から活動が始まったビブロフィリアの顧問として、小さい規模でビブリオバトルを楽しみ始めた頃です。

そういう状況が一変したのが、Library of the Year 2012でビブリオバトルの名前が優秀賞受賞機関として発表された際に、大賞を決定するための最終選考会のプレゼンター役を務めるという任務が課せられたことです。Library of the Year 2012の大賞を取ることを目指して、その当時のビブリオバトル普及委員会の関係者に依頼して、全国各地のさまざまなビブリオバトル開催データを集めたりもしました。2010年から始まった全国的な大学生大会であるビブリオバトル首都決戦も、Library of the Year 2012の最終選考会のプレゼンテーションを構成するための大事な要素の一つでした。ビブリオバトル首都決戦2012の開催日が2012年10月21日であり、Library of the Year 2012最終選考会はそこからさらに1か月後の同年11月20日という日程でした。ビブリオバトル首都決戦2012に教え子が出場(皇學館大学としてはビブリオバトル首都決戦に初出場)することもあり、私は引率者として会場である秋葉原に出かけました。それは大学生大会に出場する教え子の引率という理由のほかに、Library of the Year 2012最終選考会のプレゼンテーションのための実態調査という意味もありました。ビブリオバトルという社会現象はいったいどのようなものかを自分の目でしっかりと見ておかななくてはならないという強い思いで、ビブリオバトル首都決戦2012を観戦しに行きました。プレゼンテーションの説得力も変わったと思いますので、大会の熱量を自分の目で見て確認しておいて良かったと思います。

Library of the Year 2012の結果は、審査員の票数としてはとても僅差でしたが、ありがたいことにビブリオバトルは大賞を受賞することができました。同じタイミングでLibrary of the Year 2012の優秀賞を受賞した機関として、

CiNii、saveMLAK、三重県立図書館がありました。私は先にビブリオバトルのプレゼンターが決まっていたために、あいにく三重県立図書館のほうはプレゼンをお引き受けすることができず、そちらのプレゼンターはその当時の私の同僚であった高倉一紀先生（2017年1月に逝去）にお願いすることになりました。

そして2012年11月26日、知的資源イニシアティブの公式ウェブサイトにも谷口さんの大賞受賞コメントが掲載されました²⁰⁾。

僕達がビブリオバトル普及活動の中で、いつも言っていることなのですが、ビブリオバトルの目標は、サッカーやドッジボールと同じような「普通名詞」になることです。日常生活の中に自然と存在するビブリオバトルになれるまで、今後とも、このままだまだ新しい「概念」の普及と定着にご支援、ご協力いただければ幸いです。

この谷口さんのコメントを読んで、「ビブリオバトルに対して大きな貢献ができた」「大役は果たした」という思いを抱きました。この時点では、今後はビブリオバトルに対してこれ以上の大きな貢献することもないだろうと思っていました。Library of the Year 2012の大賞受賞のときは、ビブリオバトルの関係者もお祭り気分になっていましたが、少し時間が経てば、またこれまでと同じような日常がやってきます。大賞受賞という結果は記録としてその先まで残っていくことにはなりますが、最終選考会場で感じた熱量はそのときだけのものです。大賞受賞の余韻には浸りながらも、次の展開がやってくるだろうということは想像がつかしました。そして私自身は、この先にビブリオバトルに対してそれほど大きな貢献をすることはないだろうという思いがあったのです。2013年6月の理事就任、2015年6月の代表理事就任という展開を知っている現在から見ればそうはならなかった未来になっていることはわかりますが、Library of the Year

2012の終了直後は、私とビブリオバトルとの関係は到達点に達したように感じていたのです。

5.4 ビブリオバトル普及委員会の代表理事

そのような思いもあったので、理事になってから2年後に谷口さんがサバティカルで日本を離れることになり、代表理事の役目を私に譲りたいという話になったときはほんとうに驚きました。私は今でこそビブリオバトル普及委員会のメンバーとしては古い方になっていますが、その当時は比較的新参者の立場にあり、もっと早くから谷口さんと一緒に普及委員会を形づけてきた人たちもいらっしやっただけです。「ビブ人名鑑」にインタビューが掲載されている中津壮人さん、吉野英知さん、飯島玲生さんなどは、ビブリオバトル普及活動の草創期からのメンバーですので、そういう人を差し置いて私が出ていく話ではないと考えていたのです²¹⁾。

ところがそういう展開にはならず、私に声がかかることになったのです。即答では快諾することはできなかったと思います。しばし悩んでお引き受けすることになりましたが、結局は代表理事の役目というのは、あくまでもビブリオバトル普及委員会という組織を維持・発展させていく立場であるので、活動年数はそこまで気にしなくても良いという考えに至りました。それと本業との兼ね合いで代表理事を務めることができない（勤務先の兼業規程に引っかかる）という人もいて、そのあたりは谷口さんや私のように、大学教員という立場にいる人の方が何かと動きが取りやすいという判断もありました。谷口さんから「Library of the Year 2012の大賞受賞のときのプレゼンターも務めたので（普及委員会内でも名前が知られているし）適役だと思う」という誘い文句をもらっています。

ここでこの話を受ければ、「より図書館業界とのつながりを強くできるのでは？」という思いが私のなかに出てきました。図書館業界にお世話になっている自分がビブリオバトル普及委員会の代表になれば、図書館におけるビブリオバ

トルの開催を後押しできるのではないかと思います。ようになったのです。ビブリオバトル考案者の谷口さんが代表の役目から下りるという事態は、ビブリオバトル普及委員会にとってとても大きな変化になります。二代目の代表になる人は、どう考えても谷口さんの実績と比較されることになります。けれども、ビブリオバトルと図書館業界とのつながりを考える上で、代表交代というできごとは重要な転機になるという予感もあったのです。代表就任を受諾する覚悟の気持ちが芽生えたのは、やはり **Library of the Year 2012** で大賞を受賞した際のプレゼンターを務めたという過去の自分の姿を思い出したからです。

もちろん私が代表を務めるからといって、それがそのまま図書館での普及が進むことに直結するとは言えないですし、大きな変化につながるままかもしれません。とはいえ、日常的に図書館というキーワードについて考えている立場にいる自分からは、少なくとも図書館に関係する形でビブリオバトルを語る場面が増えることは間違いないだろうとも思いました。当初は自分の意志で選んだわけではありませんが、このような経緯で2015年6月から2021年6月までの6年間をビブリオバトル普及委員会の二代目の代表理事として過ごすことになったのです。

こうしてこの10年くらいの動きを振り返ってみると、私はビブリオバトルの普及活動に関わったことで **Library of the Year 2012** のプレゼンターの役目をいただくことになり、プレゼンターを務めたことでビブリオバトル普及委員会の理事の役目と二代目の代表理事の打診を受けるようになったわけです。そしてビブリオバトル普及委員会の代表理事を務めてみたら、そのことがさらに **Library of the Year** の選考委員長のご指名を受けるきっかけにもなっています。どちらも自分から代表理事や選考委員長を務めようと手を挙げたわけではなく、きっかけはそれぞれのキーマンである谷口さんと山崎さんからのご指名によるもので、私は誘われるままにその立場をそのまま受け入れただけなのです。

前述したように、山崎さんからは「ビブリオバトル普及委員会の代表も長く務めていたから適役でしょう」と言われ、谷口さんからは「**Library of the Year 2012** の大賞受賞のときのプレゼンターも務めたので（普及委員会内でも名前が知られているし）適役だと思う」と言われました。偶然にもお二人が似たような言い方をされています。どちらが先なのか後なのかがわからなくなるくらい、私という存在を介して、**Library of the Year** とビブリオバトルの取組みが重なってきます。公共図書館からも本をめぐる環境としてもそれほど恵まれていなかった幼少時代を過ごした私としては、これはとても不思議なめぐり合わせのように感じます。

Library of the Year は2006年に、ビブリオバトルは2007年というように、ほぼ同じ時期に始まっています。両者の始まりのタイミングは、いずれも私がスロベニアに滞在中のできごとであり、私自身は日本国内の動向にはそれほど目が向いていなかった時期になります。ひたすらスロベニア国中のさまざまな施設を訪ね歩いていた頃ですので、**Library of the Year** もビブリオバトルもそれぞれの活動初期のことはまったく把握していません。しかし、それらの取組みが動き始めたこの15年くらいの間に、私はその近くで活動を見ることができるよう立場が変わってきました。私はたまたまそれらの節目のときにその近くに立っていました。これはほんとうにご縁としか言いようがありませんが、それでもARGカフェ&フェストを通じた岡本さんや福林さん、ツイッターやブログを介した佐藤さんや岡部さんのお名前を思い返さずにはられません。

「本について語り合う」ことを目指すビブリオバトルと「図書館について語り合う」ことを目指す **Library of the Year** は、両方ともとてもおもしろい取組みです。ビブリオバトルと **Library of the Year** は、それぞれが別の取組みとして始まったものではありませんが、けれどもどちらの取組みも対象のおもしろさや良いところを言語化し、共有するという活動であるという点では似

ています。私のなかではそれほど大きな差を感じません。それぞれが始まったときの詳しい経緯を知らない立場にいるために、私はそれらを一步引いた目で見ているからかもしれません。

熱意や愛情をもって誰かが本や図書館について「語る」ことはおもしろいです。私はそういう場面を見るのがとても好きです。そういう機会をつくることも好きです。ビブリオバトル普及委員会の代表理事のお役目も **Library of the Year** の選考委員長のお役目も、たまたまそういう時間と場所をつくる立場が私のところめぐってきたわけです。こうなった背景をたどってみても、図書館情報学を学ぶことを選択した高校生のときからの大きな流れを強く感じます。

6. 一箱古本市

6.1 ホンツツキの一箱古本市

私は本について「語る」機会が好きなのだと気づき始めた頃、一箱古本市という取組みを知りました。そして私は 2015 年から、当時のゼミ生たちと一緒に伊勢河崎一箱古本市というイベントを始めました²²⁾。本を活用したコミュニティづくりの楽しさを私が知ったのは、ビブリオバトルの普及活動に関わるようになったことだけでなく、学生たちと一箱古本市にも取り組むようになったことが大きかったと思います。

2014 年 6 月 1 日から 22 日にかけて、津市の一人出版社カラスブックスの西屋真司さんがホンツツキという本のイベントを企画されました。そのなかでビブリオバトルを実演してくださいと頼まれまして、当時のビプロフィリアの学生たちと参加しました²³⁾。ビプロフィリアは既に 2012 年 7 月の時点で正式に設立されていましたし、2013 年度からは三重県教育委員会との連携事業も始まっていたので、2014 年頃には多様な依頼にも対応できるようになっていました。ビブリオバトルを介して物事が動き始め、活動の手応えを感じるようになった時期になります。

そして伊勢には古本屋ぼらんというすばらしい古本屋さんがいます。店主の奥村悠介さん

とは私と同世代なのですが、奥村さんもこのときに古本屋を出店されており、あわせて一般からの参加者を募った一箱古本市が実施されました。三重県初の一箱古本市がこのときに西屋さんが企画されたホンツツキになります。地方において一箱古本市の取組みが動き出す瞬間に立ち会えたことは、とてもありがたいものだと思われ振り返ってみても思います。そして「ぜひ伊勢でも古本市をやりたいですね」と奥村さんと構想を話し合うようになりました。「ぜひ伊勢河崎の勢田川沿いでやりましょう」と実施会場のことも早い段階で決めました。

そもそもカラスブックスという出版社を知ったのは、2011 年に伊勢に引越してすぐの頃に、西屋さんが発行していた『kalas』という小冊子を伊勢市内のカフェで見かけたことに始まります。これがとてもすばらしい小冊子で、ひと目で『kalas』のファンなり、すぐにバックナンバーも買い揃えました。いずれご本人にもお会いしたいと思っていたところで西屋さんとも面識を得るようになりました。その後の数年間にわたって皇學館大学の図書館司書課程のゲスト講師としてお越しいただくようになり、地方で出版社をすることの話をたびたび聞かさせていただきました。地方で本の仕事をする事、そして本に関わり続けるということについて、西屋さんの姿勢から学んだことはとても多いです。

6.2 伊勢河崎一箱古本市

西屋さんのホンツツキに影響を受けて、2015 年から伊勢河崎一箱古本市を開始しました。発起人は私と古本屋ぼらんの奥村さんであり、そこに私のゼミ生たちが関わってきます。また、これは毎年 10 月の第 4 日曜日に河崎商人市というお祭りを続けている NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆のみなさまとの連携事業でもあります。ちょうどこの頃、皇學館大学は文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」に採択されたことで、学生による地域連携活動を強く推し進めていました。学生たちの地域連携活

動に対して大学が補助金を出してくれる制度もあったため、それを活用して一箱古本市の活動資金としました。開催にあたってのポスターやチラシの印刷、出店者証として配布する公式の缶バッジの制作、活動報告書の印刷製本のほか、郵送に必要な経費などもこの予算から出しています。また、看板制作やロゴデザインは大台町にある *nijiuro* の稲葉直也さんをお願いしました²⁴⁾。カラスブックスの西屋さんにもアドバイスをいただきながら、伊勢河崎・川の駅周辺の勢田川遊歩道を会場として、伊勢河崎一箱古本市が実際に動き出します。このときの第 1 回目の伊勢河崎一箱古本市については、西屋さんが 2016 年の『*kalas*』第 28 号にも書いてくださいました²⁵⁾。

伊勢河崎一箱古本市は 2015 年から 2019 年まで毎年 10 月に開催してきました（2017 年のみ台風 21 号の影響で 11 月に延期となっています）。これまでに 5 回の開催実績があります。残念ながら 2020 年と 2021 年は COVID-19 の影響で開催を見送りました。第 1 回の開催時のみ、その当時に 3 年生だった私のゼミ生たちが企画・運営を担いましたが、2016 年に開催した第 2 回目からは、後述する皇學館大学附属図書館の学生協働団体ふみくら倶楽部による企画・運営に活動主体を変更しています。毎年のように約 20 店ほどの出店者があり、地元に着してきたイベントへと成長しています。持ち寄られた古本の売買をきっかけとして、多くの来場者同士で語り合う声会場内にあふれてきます。毎年の一箱古本市を主催しながら、私はとても楽しくその様子を眺めています。三重県内では 2018 年 9 月から尾鷲市で熊野古道一箱古本市も始まっており、本を活用したコミュニティづくりを楽しもうとする流れができています²⁶⁾。

7. ウィキペディアタウン伊勢

2015 年 4 月に小林巖生さんがアカデミック・リソース・ガイドのメールマガジンに寄稿された「ウィキペディアを通じてわがまちを知る」という記事により、私はウィキペディアタウンと

いう取組みを知りました²⁷⁾。2015 年のうちは企画を詰められずに実施することができなかったのですが、翌 2016 年になったときに、ウィキペディアタウン伊勢を実施してみましょと設立されたばかりのふみくら倶楽部の学生たちに話を持ちかけました。学生たちも乗り気で即座に企画案がまとまり、前述した地域連携事業の予算を大学に申請しました。実施にあたってはウィキペディアンの日下九八さんに講師を依頼し、伊勢にお招きしました。日下さんの宿泊・交通費や実施後の活動報告書のための印刷製本費は、大学からの予算を活用することができました。

ウィキペディアタウン伊勢へと直接つながってくるわけではありませんが、個人的にその前段階として参考になる取組みが二つあります。一つ目は、2012 年にその当時に国立情報学研究所 (NII) にいた中村佳史さんのお声がけで、「伊勢ぶらり」というまちあるき支援アプリの作成に関わらせてもらったことです²⁸⁾。中村さんとの出会いは、私が伊勢に来る前の 2010 年に遡り、アート・ドキュメンテーション学会の委員会の打ち合わせで顔を合わせたことに始まります。本来の目的だった学会の打ち合わせが終わった後に、中村さんにお声がけいただき、そのまま居残って二人で雑談を続けました。私が一人きりで行っていた文学館研究会の取組みを知って、興味を持ってくださっていたようです。中村さんとはその場で意気投合し、いずれまた何かの機会にご一緒できればという話をしました。その後、私が伊勢に移住したときとほぼ同じタイミングで、ちょうど中村さんも三重県の文化財事業としての「伊勢ぶらり」のお仕事をご担当されていました。せっかくなのでご一緒にいかがですかと中村さんから打診を受け、私と当時のゼミ生たちも含めて「伊勢ぶらり」の開発に関わらせてもらえることになりました。そして二つ目は、同じ 2012 年に田原市図書館館長(当時)の豊田高広さんと愛知大学(当時)の時実象一先生のお声がけで、「お散歩 e 本」という電子書籍の開発プロジェクトに関わらせてもらったこと

です²⁹⁾。これら二つのまちあるきの取組みは、それぞれが別のプロジェクトとして進行していたのですが、たまたま同じタイミングでその両方に私も関わることになったのです。

2012年に続けて経験したまちあるきというテーマは、翌2013年5月に開催した図書館総合展フォーラム2013 in 伊勢で私が担当した基調講演のテーマにもつながってきます。伊勢での図書館総合展は開催テーマとして「東海圏に学ぶ MALUI 連携」を掲げていましたが、私は第一部の基調講演／第二部のパネリスト／第三部のコーディネーターと、企画の全編にわたって登壇することになったのです。当日までに会場手配などの事務作業も担当していたので、振り返ってみてもとても大変だったのですが、このときの登壇経験は私の意識をまちあるきへと向かわせるきっかけとなりました。図書館サービスとまちあるきが重なっていく気配を強く感じ始めた頃です。こういった動向とほぼ同時期の2013年2月には、日本で最初のウィキペディアタウンが横浜市で開催されていたわけです。

以上のような経緯で私は図書館におけるまちあるきという活動におもしろさを感じるようになったのですが、そのようなタイミングでウィキペディアタウンという取組みを知ってそれに強い関心を持ち、2016年9月にウィキペディアタウン伊勢の企画が実現することになります。その背景には、「伊勢ぶらり」「お散歩e本」の取組みと伊勢での図書館総合展の開催という流れがあったことは改めて強調しておきたいです。

ウィキペディアタウン伊勢を実施するには、ウィキペディア日本語版管理者の日下さんのお世話になりました。また、伊勢市立図書館の職員の皆さまにも快くご協力をいただきました。ウィキペディアタウンはその翌年に Library of the Year 2017 の優秀賞を受賞することにもなるので、それよりも1年ほど早い時点で実施できていたことは、初期のふみくら倶楽部の活動実績としてもとても良かったと思います³⁰⁾。

ウィキペディアタウン伊勢では、①伊勢河崎

商人館、②伊勢うどん、③伊勢春慶、④萬金丹、⑤伊勢市立図書館、の5項目を編集することにしました。午前中に伊勢河崎商人館に集合して日下さんの説明を聞き、そのまま伊勢のまちをあるきながら伊勢市立伊勢図書館を目指します。途中にあるつたやといううどん屋さんを訪れ、参加者全員で伊勢うどんを食べながらつたや店主の青木英雄さんのお話を聞きました。伊勢市立伊勢図書館にたどり着く前に、伊勢春慶と萬金丹も見学しています。午後は図書館の地域資料を用いてひたすら執筆に励みます。時間も限られているなかで出典となる情報をきちんと調べ、説明するための記事を執筆し、公開までつけていくのは簡単なことではありませんが、それでも伊勢河崎商人館の記事を新規立項できたのは大きな成果の一つだったと思います。もともとは「東海地域で初のウィキペディアタウン」を目指して計画していたのですが、伊勢での開催一週間前に豊橋市でウィキペディアタウンが実施されたので、急遽広報の文言を「三重県初のウィキペディアタウン」に変更しました。

その後も継続的に実施できればとは思っていたのですが、実現できないままに過ごしているうちに3年ほど過ぎてしまいました。そして熊野市出身の私のゼミ生が地元でウィキペディアタウンをぜひ実施してみたいと熱望していたので、各方面のご協力を仰ぎながら準備を進めてきましたが、2020年になって COVID-19 が広まってしまったことで結局は開催を見送ることになってしまいました。学外活動の自粛により、その学生も結局実施ができないままに卒業の時期を迎えてしまいました。学生時代に実施できずに心残りだったと思いますが、いつかどこかで再度企画を進められたらなと思っています。

なお、三重県内でのウィキペディアタウンは、2021年7月に三重県立津高等学校図書館の学校司書・井戸本吉紀さんの発案により、高校生が主体となって津市安濃町を舞台として実施することになりました。こちらも本来は2020年のうちに実施する予定で計画を進めていたのですが、

COVID-19 の影響によって延期となっていたものです。企画段階では皇學館大学ふみくら倶楽部の学生たちも一緒になって行う予定でしたが、感染症対策として大学生たちの参加は見合わせ、私だけがアドバイザーとして参加することになりました。高大連携事業としても期待していたプロジェクトだったのですが、今日の社会状況下ではやはり難しいものがありました。いつかまた別の機会に、三重県内のウィキペディアタウンで一緒に顔を合わせてみたいと思います。

8. ブックピクニックと全国図書館大会

学生たちと一緒に 2015 年から伊勢河崎一箱古本市の開催を毎年続けてきましたが、こういった活動に注目してくれた人に、多気町の少女まんが館 TAKI 1735 館主の志村さくらさんがいます。志村さんはご夫妻で多気町に移住され、少女まんが専門の図書館を運営している方ですが、本を通したコミュニティづくりに強い関心を持っている方でもありました。そこで多気町立勢和図書館の方々と一緒になって、2018 年からブックピクニックという本を活用したイベントを始めることになりました。

初回となる 2018 年は多気町にあるふれあいの森・勢山荘にて、2 回目の 2019 年は多気町立勢和図書館前の広場で実施しています。図書館・新刊書店・古本屋・地元の出版社を中心に、飲食ブースとしてカフェやキッチンカーが集まり、さらに地元の皇學館大学の学生たちが運営に携わって実現した本のイベントとして、とてもおもしろい形に仕上がったと思います。いずれもふみくら倶楽部の学生たちが主催者として関わっていますが、ここには伊勢河崎一箱古本市の開催経験が活かされています。2018 年はあいにくの雨模様になったために室内での開催になってしまいましたが、2019 年は快晴の天気となり、当初理想としていた形が実現できたと思います。

志村さんから本を活用したイベントを地域のなかで開催したいという相談を受けたとき、イメージしていたのは既に開催経験のあった伊勢

河崎一箱古本市なのですが、個人的にはそれをさらに遡るもう一つの思い出深いできごとがあります。それは 2013 年から 2016 年にかけて、毎年 1 回ずつ全 4 回にわたって開催されてきた **komichi market** というイベントです³¹⁾。これは三重県内で人気のあるカフェや雑貨店などが集まり、音楽のライブ演奏などとともに実施されてきたマルシェです。初回から第 3 回まではラブリバー公園（伊勢市）で、第 4 回は旧鳥羽小学校校庭（鳥羽市）が会場となっていました。

初回（2013 年 11 月）の **komichi market** では私はあくまでも来場者の立場で買い物を楽しんでいたのですが、第 2 回（2014 年 4 月）が開催されたときには、イベント主催者の一人である **quark+grenier** というカフェのオーナー・多賀淳一さんにお声がけをいただき、関係者の一人として小さな古本屋を出店することになりました。大学教員という本業は明かさず、屋号として **BUKVARNA**（ブックヴァルナ）と名乗りました。このお店の名前は、スロベニア滞在中に訪れたリュブリャナ市内の量り売りの古本屋さんの名称をお借りしたものです。出店のタイミングとしては 2014 年 6 月のホンツツキや 2015 年 10 月の伊勢河崎一箱古本市を開催するよりも早く、マルシェで古本を売ることのおもしろさを私はこのとき個人的に体験していたのです。

私はこのときまで古本販売などにまったく関わっていなかったわけなので、内沼晋太郎さんが 2009 年に書かれた『本の未来をつくる仕事／仕事の未来をつくる本』（朝日新聞出版）や、2013 年の『本の逆襲』（朝日出版社）を参考に、売り物となる古本を準備しました。三重県内でもよりすぐりの人気店が集まるなかに素人の私が顔を出すのは緊張もしましたし、準備も大変なところはあったのですが、出店側として参加してみたのはとても楽しかったですね。出店準備では、古本屋ぼらんの奥村さんにもご協力をいただきました。このときの経験は、後に主催・運営側として関わることになる伊勢河崎一箱古本市やブックピクニックの取組みにもつながっ

てくることとなります。komichi market に出店したのはこのときの 1 回限りでしたが、私をイベントの仲間に入れてくださった多賀さんのお声がけはとてありがたかったです。

偶然にも 2019 年は、全国図書館大会が三重県で開催されるというタイミングにもなっていました。このときに三重県立図書館の職員さんがブックピクニックに注目してくださり、全国図書館大会の公共図書館分科会のテーマにしてくださいました。ブックピクニックの関係者として、皇學館大学から私とその当時のふみくら倶楽部の 4 代目部長の三木彩花さん/5 代目部長の岡村真衣さんが登壇することになりました。そのほか、少女まんが館 TAKI 1735 の志村さん、多気町立勢和図書館の高橋直子さん、尾鷲市にあるトンガ坂文庫の豊田宙也さんと本澤結香さんがパネリストとして壇上に上がっています。コーディネーターは三重県立図書館の長久哲平さんに務めていただきました。ブックピクニックを当初企画したときには、まさか全国図書館大会で事例発表することになるとは思いませんでしたが、こうして全国的にも注目されるような取り組みへと育てていったのは、ご協力・ご来場いただいたたくさんの方のおかげです。

伊勢河崎一箱古本市と同様に、ブックピクニックも COVID-19 の影響を考慮して 2020 年と 2021 年は開催を見合わせました。こちらでもできれば継続的に開催したかったところですが、COVID-19 が収まればまた動き出してみたいイベントの一つです。また、全国図書館大会は 100 年以上の歴史があるなかで初めての三重県開催ということだったので、そのときに三重県内で仕事をしていたことはとてもタイミングが良かったと思います。

9. 図書館総合展と学生協働

9.1 ふみくら倶楽部と学生協働

2016 年 2 月末に、ふみくら倶楽部という皇學館大学附属図書館の学生協働団体を設立することになりました。その当時に 3 年生だった私の

ゼミ生の岡野ひかりさんが中心となって設立に動き出したものです。ひかりさんは 2015 年の秋に横浜で開催された図書館総合展に自主的に来場しており、他大学の取組みから学生協働という活動を知ったようで、4 年生に学年が上がる直前という時期に自らメンバーを集め、図書館職員さんと一緒になって学生協働団体を立ち上げました。教員や職員が主導する形ではなく、学生自身が自主的に図書館総合展に参加したところから動き出したことが特徴的だと思います。

皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部は、全国各地の他大学の大学図書館の動向と比べると、タイミング的には周回遅れで始まった学生協働団体です。それでも運が良いことに、この年の秋から全国学生協働サミットというイベントが図書館総合展のフォーラムとして開始され、それに参加したことで活動に弾みがつく形になりました。ふみくら倶楽部は団体設立からわずか半年後にもかかわらず、この初回の全国学生協働サミットで事例報告をする機会をいただくことができたのです。卒業論文で忙しいはずの 4 年生の秋という時期でしたが、ひかりさんは創設者かつ初代部長として、全国学生協働サミットの舞台に立って報告を行いました。活動が始まってから 9 か月後には部長を後輩に譲ることになりましたが、卒業間際の 2016 年 12 月いっぱいまでその役目を担ってくれました。ほかの大学の事例報告を聞いてみれば、10 年くらいの活動実績を持つ団体もあるわけなので、第 1 回目の全国学生協働サミットの時点では、活動開始からわずかに半年という実績では、活動内容の蓄積という点では明らかに少なかったわけです。しかし、上に書いた伊勢河崎一箱古本市やウィキペディアタウン伊勢など、早い段階から学外へと積極的に向いていく学生協働というスタイルができ上がっていたことは全国的にも珍しかったようで、従来の学生協働のイメージが変わったという好意的な感想をいただきました。

ふみくら倶楽部による学生協働の取組みについては、毎年秋の全国学生協働サミットで発表

を行っています。2016年は岡野ひかりさん(初代部長)、2018年は三木彩花さん(4代目部長)、2019年は岡村真衣さん(5代目部長)、COVID-19の影響でオンライン開催となった2020年は市川桃子さん(6代目部長)、2021年は尾崎薫さん(7代目部長)・打田楓茄さん・谷川奈穂さん・山本朋奈さんの4名というように、聴衆参加のみだった2017年以外は、そのときの部長を中心として積極的に発表を行ってきました。また、毎年9月に行われる学生協働フェスタ in 東海でも、2017年は坪井あみさん(2代目部長)と中井美月さん(3代目部長)の2名、2018年は中井さん・尾崎ななみさん・河野亜美さんの3名でプレゼンを行っています。2019年の開催時にはみんなでポスター発表を行ってきました。

ふみくら倶楽部の活動について、4代目部長の三木さんが「学生協働の取り組みは学生・職員・教員の間でどのように違って見えているのか：皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部の4年間を事例として」という文章を卒業前にまとめてくれました³²⁾。2016年2月末に活動を開始したふみくら倶楽部の立ち上げは、三木さんが入学する直前のできごとになります。つまり三木さんは1年生の始めから4年間を通じてふみくら倶楽部に在籍した初めての学年であり、また、3学年違いとなる初代部長のひかりさんの在学中の姿を知っている最後の世代にもなります。三木さんが卒業することで、最初期の活動の様子を知る学生はいなくなりましたが、それでも学生協働団体としては先輩から後輩の学生へと継承されていきます。ふみくら倶楽部の初期からの活動状況について、三木さんが文章に残しておいてくれてほんとうに良かったと思います。

私自身は顧問教員としてふみくら倶楽部に関わっておりますが、それは学生たちの活動に教わる機会が増えてきたということでもあります。2019年6月には「大学図書館における学生協働とは何か」という論文を発表したこともあって、この頃には学生協働というテーマについて語る機会がずいぶんと増えてきました³³⁾。これは全

国各地の事例を参考にした部分も多いのですが、何よりも普段から学生協働とは何をするのかということと一緒に考えて、実践してくれているふみくら倶楽部の学生たちのおかげです。

9.2 図書館総合展への参加

2013年5月に図書館総合展フォーラム2013 in 伊勢に登壇した流れで、同年秋の図書館総合展において私は個人でブースを出展することになりました。しかし、個人での出展となるので、ブースで取り上げるネタを十分に用意することはできません。苦し紛れに絞り出したアイデアが、伊勢での図書館総合展で話したことの延長となる形で「地域資料としての食文化」という切り口から伊勢うどんについて語ることでした。そのなかの企画として実施した「伊勢うどん対談」では、コラムニスト/伊勢うどん大使の石原壮一郎さんのお世話になりました。2013年は石原さんが『伊勢うどん全国制覇への道：食べるパワースポット』(扶桑社)を出版され、伊勢うどん友の会の活動を活性化させ始めていた頃でしたので、図書館総合展で伊勢うどんの話をするのにちょうど良いタイミングだったと思います。

また、ブース出展に際しては三重県在住のイラストレーターの本城まい子さんとハッチラボ(津市)の安部さんにグッズ制作の面で多大なご協力をいただきました。そして伊勢河崎のモナリザというカフェの中谷武司さんと橋本ゆきさんには、伊勢うどんの準備でお世話になりました。その当時のゼミ生たちも何人かが自主的に図書館総合展に参加してくれていて、私のブースにも交代で常駐してくれました。ふみくら倶楽部の創設前から学生たちが当たり前のように図書館総合展に参加していたのは、この2013年のときのブース出展も大事な過程の一つになっています。図書館総合展に参加するという流れはこのときに始まり、先輩学生から後輩学生へと受け継がれていきます。2015年にひかりさんたちがふみくら倶楽部を設立するきっかけをつかんだのも、そういう先輩学生たちの振る舞い

に学んだことが大きかったのだと思います。

学生たち自身が主体的に図書館総合展に参加したところから始まったふみくら倶楽部の事例のように、学びと交流が進んでいく場として、図書館総合展には積極的に参加してほしいと思っています。全国学生協働サミットの参加だけに留まらず、2019年当時に学部3年生だった岡村真衣さんは図書館総合展のミニフォーラムとして「手品を図書館に！」を、学部4年生になった2020年の図書館総合展ではオンラインフォーラムとして「図書館と手品資料をつなぐ」を個人で実施していました。図書館総合展の出展者はその多くが団体としてのエントリーになっていると思いますが、現役の学部学生が個人としてフォーラムを開催するというのは、図書館総合展の歴史のなかでも相当珍しい事例だと思います。2年連続となる岡村さんの企画には私も事前に相談にはのっていましたが、その内容は岡村さん自身が自主的に進めていったものです。この展開にはゼミの指導教員として接していた私もとても驚かされました。指導教員の立場ではありませんでしたが、私自身もあくまでも一人の聴衆として岡村さんの話を楽しく聞いていました。

2013年のブース出展の頃を回想してみると、その当時は教え子の学生たちが図書館総合展に参加するようになっただけでも大きな変化だと感じていましたが、2015年にはふみくら倶楽部設立のきっかけをつかんでくるようになったり、そういった先輩学生が切り開いてきた道をたどることで、2016年以降は全国学生協働サミットへの参加とつながったりするという展開になります。学生たちが図書館総合展に参加することが当たり前のようになり、たくさんのことをそこから学び始めた教え子たちの姿は見ていてとても頼もしかったです。2012年までの私は図書館総合展に参加していてもフォーラムへの登壇・聴講やブース見学だけで満足していましたが、2013年以降になると、自費で横浜までやってきて図書館総合展という場で学び始めた学生たちを、いかにして図書館関係者や図書館関係

企業とつなげていくのかを考えるようになりました。これは2014年から毎年のように「図書館総合展における学生のための展示ブースツアー」を企画されている図書館総合展運営委員会のみなさまや、全国学生協働サミットの企画・運営に長く関わっていらっしゃる日向良和さん（都留文科大学）、野末俊比古さん（青山学院大学）、今井福司さん（白百合女子大学）たちのおかげでもあります³⁴⁾。こういった学生たちの図書館総合展への参加の意義については、2017年に「図書館総合展を学生たちの学びと交流の場に：皇學館大学の事例から」という文章にまとめていますのでよろしければそちらもご確認ください³⁵⁾。

10. おわりに

今回の誌上講演会では、私自身のこれまでの歩みを振り返るように長々と自分語りをしてしまいました。大学院生だった頃は書誌や文学館といったキーワードを用いて文学資料の保存や活用などの問題を考えてきましたが、ここ数年はより大きな視点から私たちの書物文化・地域文化について考えることが増えています。ビブリオバトル、Library of the Year、ウィキペディアタウン、学生協働などは、単に「どうやって本を読むのか」という問題だけではなく、私たちが「どうやって本に出会っているのか」、あるいは「本を読める環境とはどういうものか」などの問題について考えたいということでもあります。

本に出会うということは簡単なことのように思えながらも、その人が住んでいる環境とか周りの人たちとの関係に左右される部分がとても大きいと感じています。そのためにはそれぞれの地域における図書館や学校教育のことを考えなければなりません。私たちが暮らす地域の文化や歴史の積み重ねにも関心を持たなければなりません。そしてまた、読書や読者といったテーマについても考え続けなければなりません。

冒頭の身の上話において、幼少期に公共図書館を利用する習慣がなかったと述べましたが、私が以上のような考えに至ったのは、そもそも

成長の過程で公共図書館というものを実際に経験する機会がなかったというような、自分の育ってきた環境の影響が強かったのではないかと考えています。私にとっての公共図書館は自らが「つかう」ものではなく、あくまでも図書館について「考える」対象として見えていたということです。私自身は公共図書館を習慣的に利用するという原風景をほぼ持っていませんが、それはあくまでも子供の頃に利用者としては関わる機会を持てなかったというだけの話です。幼少期の読書環境が十分ではなかったために、大人になった私はかえって読書や読者の問題に関心が向くようになったようにも思うのです。

ビブリオバトルでほかの誰かに対して本をすすめる言葉を紡いだり、Library of the Yearによって図書館の良いところを言語化したり、一箱古本市で人と人が古本を介して語り合う様子を眺めたりしていると、身近なところに公共図書館がなかった幼少期の自分の置かれた環境を思い出します。そういう環境に育ったことは、結果的に「図書館とは何か」「本とは何か」「読書とは何か」という問いかけについて、私自身が継続的に追い求めている現在の関心領域へとつながっているように思います。そういった興味関心のきっかけを与えてくれたみなさまには、改めて感謝の言葉を申し上げます。図書館情報学を通して出会った図書館というもののすばらしさやその魅力について、これからもその研究者の一人として考え続けてみたいと思っています。

[参考・引用文献]

- 1) 旧東村立図書館が合併によって稲敷市立図書館になったため、現在では見かけ上は図書館未設置自治体ではありませんが、実態としては旧新利根町には公民館図書室のみが整備されている状況です。
- 2) 有川先生はその後に司法試験に合格され、現在は有川法律事務所を開業されています。
- 3) 岡野裕行. 日本近代文学研究における文学館の役割:「全国文学館協議会」加盟文学館の発行物を中心に. 筑波大学 (博士論文), 2006-06. <[http://hdl.](http://hdl.handle.net/2241/91435)

- handle.net/2241/91435> (最終確認 2022-02-07).
- 4) アート・ドキュメンテーション学会. 第8回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞受賞者. 2014-06. <<http://www.jads.org/award/NOGAMI2014.pdf>> (最終確認 2022-02-07).
- 5) 岡本真, 大向一輝. ライトニングトークとパブでの立食パーティーによるコラボレーション促進の試み. 人工知能学会全国大会論文集. JSAI2010, 2010. <https://doi.org/10.11517/pjsai.JSAI2010_0_1G30S104> (最終確認 2022-02-07).
- 6) 図書館史勉強会@関西 関西文脈の会. 第11回勉強会 (2012年2月26日) 報告. 2012-02-28. <<http://toshokanshi-w.blogspot.com/2012/02/>> (最終確認 2022-02-07).
- 7) 佐藤翔. 第1回 ARG カフェでライトニングトーク. かたつむりは電子図書館の夢をみるか (はてなブログ版). 2008-06-29. <<https://min2-fly.hatenablog.com/entry/20080629/1214763775>> (最終確認 2022-02-07).
- 8) 佐藤翔. 岡本さん来筑&農林水産研究計算センター、農林水産研究情報センター訪問. かたつむりは電子図書館の夢をみるか (はてなブログ版). 2008-05-04. <<https://min2-fly.hatenablog.com/entry/20080504/1209852805>> (最終確認 2022-02-07).
- 9) 佐藤翔. え、これ本当に山本順一教授?. かたつむりは電子図書館の夢をみるか (はてなブログ版). 2007-05-25. <<https://min2-fly.hatenablog.com/entry/20070525/1180110828>> (最終確認 2022-02-07).
- 10) 岡野裕行. 文学館研究会. 2019-10-25. <<https://sites.google.com/view/literarymuseum/>> (最終確認 2022-02-07).
- 11) 岡野裕行. 「図書館としての文学館」試論: 文学館研究の確立とウェブの活用構想. ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG). no.363, 2009-02-24. <<https://researchmap.jp/okano/misc/208778>> (最終確認 2022-02-07).
- 12) 田村俊作. “Library of the Year : 良い図書館を良いと言う”. カレントアウェアネス. no.297, 2008-09-20. <<https://current.ndl.go.jp/ca1669>>

- (最終確認 2022-02-07).
- 13) 博士後期課程に進学したタイミングで図書館情報大学から筑波大学の名義に変わっています。
- 14) 2010年6月27日付の以下の二つのツイートより.
<https://twitter.com/yuki_o/status/17139945663>
<https://twitter.com/yuki_o/status/17140397534>
(最終確認 2022-02-07).
- 15) ビブリオバトル普及委員会著. “皇學館大学におけるビブリオバトルの導入と展開”. ビブリオバトル入門: 本を通して人を知る・人を通して本を知る. 情報科学技術協会, 2013, p.32-36.
- 16) 岡野裕行, 河野亜美. 三重県における高校生ビブリオバトルの参加側と普及側の立場から見てきたこと. 図書館界. vol.72, no.3, 2020, p.125-133.
<https://doi.org/10.20628/toshokankai.72.3_125>
(最終確認 2022-02-07).
- 17) 皇學館企画部. “ビプロフィリア発起人の加藤優さん営む「本屋 散策舎」は5年目に”. 皇學館学園報. no.89, 2021-12, p.8. <https://www.kogakkan-u.ac.jp/cms/assets/files/md6162_1.pdf>
(最終確認 2022-02-07).
- 18) ビブリオバトル普及委員会. Bibliobattle of the Year 2021. 2021. <<https://bibliobattle-award2021.mystrikingly.com>> (最終確認 2022-02-07).
- 19) IRI 知的資源イニシアティブ. Library of the Year 2012. 2012. <<https://www.iri-net.org/loy/loy2012/>>
(最終確認 2022-02-07).
- 20) 谷口忠大. “大賞受賞のコメント”. Library of the Year 2012. 2012. <<https://www.iri-net.org/loy/loy2012/#comment>> (最終確認 2022-02-07).
- 21) ビブリオバトル普及委員会. ビブ人名鑑. 2020-. <https://note.com/com_bibliobattle/m/mc7d1db18025b> (最終確認 2022-02-07).
- 22) 伊勢河崎一箱古本市実行委員会. 伊勢河崎一箱古本市. <<https://sites.google.com/site/hitohakoise/>>
(最終確認 2022-02-07).
- 23) カラスブックス. ホンツヅギ. 2014.
<<https://www.kalasbook.com/form/event.html>>
(最終確認 2022-02-07).
- 24) nijiiro. <<https://www.nijiiro-7.com/>>
- (最終確認 2022-02-07).
- 25) 西屋真司. 誰かの使命感. kalas. no.28, 2016-04, p.15.
- 26) 熊野古道一箱古本市実行委員会. 熊野古道一箱古本市. <<https://kumanokodolhako.jimdofree.com/>>
(最終確認 2022-02-07)
- 27) 小林巖生. ウィキペディアを通じてわがまちを知る. マガジン航. 2015-05-07. <<https://magazine-k.jp/2015/05/07/making-wikipediatown/>>
(最終確認 2022-02-07).
- 28) 三重県環境生活部文化振興課拠点連携班. 伊勢ぶらり. <<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/77351034756.htm>> (最終確認 2022-02-07).
- 29) 田原市立中央図書館. お散歩e本. 2013-03.
<http://www2.city.tahara.aichi.jp/section/library/info/osanpo_ehon.html> (最終確認 2022-02-07).
- 30) IRI 知的資源イニシアティブ. Library of the Year 2017. 2017. <<https://www.iri-net.org/loy/loy2017/>>
(最終確認 2022-02-07).
- 31) komichi market. <<https://www.facebook.com/KomichiMarket/>> (最終確認 2022-02-07).
- 32) 岡野裕行, 井上真美, 三木彩花. 学生協働の取り組みは学生・職員・教員の間でどのように違って見えているのか: 皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部の4年間を事例として. 図書館界. vol.71, no.5, 2020, p.288-293. <https://doi.org/10.20628/toshokankai.71.5_288> (最終確認 2022-02-07).
- 33) 岡野裕行. 大学図書館における学生協働とは何か. 情報メディア研究. vol.18, no.1, 2019, p.29-40. <<https://doi.org/10.11304/jims.18.29>>
(最終確認 2022-02-07).
- 34) 今井福司. “図書館総合展における学生のための展示ブースツアー”. カレントアウェアネス. no.321, 2017-03-09. <<https://current.ndl.go.jp/e1893>>
(最終確認 2022-02-07).
- 35) 岡野裕行. 図書館総合展を学生たちの学びと交流の場に: 皇學館大学の事例から. 図書館雑誌. vol.111, no.2, 2017, p.84-85.

(おかの ひろゆき 皇學館大学)

もつと遠くを！

三年 A組担任 有川 保

もつと遠くを見てほしい。君たち自身の将来なのだから。目前の大きな目標に向かって邁進することは、非常に大切で、一生のうち絶対に欠かせないものだ。そしてその姿は美しいものでもある。しかし、十代から二十代にかけて、それ以上に大切なことは、遠くを見据えることじゃないのか。

大学入試、これは一生を左右することもある大きなイベントであることはたしかだ。遠くを見るためのステップともいえよう。でも、高校の勉強をそれだけのために費やした人が、あまりに多いようだし、

数学は受験にいらなからやらない、理科もいらなから、社会もいらなから、なんてことばかり。文系だから数学なんて四則演算だけでいい、理科なんか知ったことか。理系だから、社会なんてわからなくていい、国語なんか読めて話せりゃいいんだ。こんな輩が多い。教員がそんな雰囲気顔をしていることも原因になっているのだろう。不幸なことであるが、現在の教育界とそれを取りまく状況から、どうしても目先にとらわれてしまい、仕方ないことで、あやまるしかない。さらに不幸なことは、君たちの御両親ですら、十年後、二十年後の職業は考えていてくれない、生き方まで考えてくれるのは少ないことである。これも仕方ないことだ。しかし最大の不幸は君たち自身にそういった将来を考えようという気持ちがないことなのだ。考えてみれば小学校以来、よい高校、よい大学、よい会社、というレールを走れといわれてがんばってきってしまったから仕方ないのかもしれない。でも、その呪縛から、そろそろ解き放されなければならない。

受験にいらなからやんなかった勉強をやってみるのだ。文系だからこそ、理系的思考方法を学ぶことで広くものを考察することが可能になり、自分を生かすフィールドを広げることができるのだ。理系にこそ哲学が必要だし、人間についての深い考察が必要なのだ。歴史の深い認識が絶対必要なのだ。

大学に入れば色々な勉強ができる。今まで入試に必要なからと、避けてきた分野の勉強ができる。文系の人なら数学や理科をやってみるのだ。必ず有益な知識、考え方、物の見方が身につくはずだ。理系の人は、社会、特に歴史と哲学をやるとよい。一流の研究者となったとき、必ず超一流に引き上げてくれるはずだ。また、「哲学的裏付け」を要求されるのが理系なのである。

高校時代に精神的近眼になってしまつて、興味がないと一言の下に退けてしまう人がいることだろう。その人はそこまでの人なのだ。高校で素養を身につけていない分、苦しいことだろう。しかし、一つのこと打ち込んで夢中になったとき、幅広い知識が君たちを救ってくれるのだ。その点で一步遅れている君達は、遠くをしつかり見据え、受験なんていうレベルの低い視点からではなく、人生に何が必要か、わからなければ逆にすべてが必要だと考えて、視野狭窄から救ってくれる知識を身につけてほしい。大学時代を逃せば多くの人は精神的弾力性を失つてしまう。遠くを見て力を蓄えるのは今しかないのだ。高校時代の分を取り戻すのだ、遠い将来まで見据えて。もつと遠くを。

※茨城県立竜ヶ崎第一高等学校生徒会「白幡」編集委員会編

『白幡(平成七年度版)』(一九九六年三月、九三〜九四ページ)

より転載。